樹脂モールド構造における内部界面 強度評価の研究

山崎 美稀

目次

第1章	序論	9
1.1	研究背景	9
	1.1.1 樹脂モールド構造とその特徴	9
	1.1.2 樹脂モールド構造を用いた製品	10
	1.1.3 樹脂モールド構造の現状と課題	12
	1.1.4 樹脂モールド構造の内部界面強度評価技術の現状と課題	14
1.2	本論文の目的と構成	16
	1.2.1 本論文の構成	18
第2章	樹脂モールド構造のプロセス	19
2.1	緒言	19
2.2	樹脂モールド試験体の界面生成プロセス	20
2.3	モールド樹脂層に発生する応力	21
2.4	熱変形量の測定	28
2.5	結言	33
第3章	樹脂モールド構造の内部接着界面のはく離実験	35
3.1	緒言	35
3.2	樹脂材料の選定と基礎特性	36
	3.2.1 樹脂材料の選定	36
	3.2.2 樹脂材料の基礎特性	38
3.3	試験体の概要と実験方法	40
	3.3.1 試験体の概要	40
	3.3.2 試験方法	41
3.4	樹脂モールド構造の接着界面はく離実験	44
3.5	せん断力と面圧との関係	45

3.6	結言	47
第4章	接着・摩擦有限要素解析手法の提案	49
4.1	緒言	49
4.2	界面に作用する力のモデル化	50
4.3	有限要素法に基づく接触解析手法	51
	4.3.1 残留応力による面圧作用	53
	4.3.2 接触界面の摩擦力の作用	53
	4.3.3 接着界面の接着力の作用	54
	4.3.4 有限要素法に基づく接触解析手法	54
4.4	接着係数および接着強度指標の妥当性検証...............	56
	4.4.1 接着係数および接着強度指標の定義	56
	4.4.2 せん断力の実験値と解析値の比較	56
4.5	気中絶縁ロッドの開発への適用	62
	4.5.1 有限要素モデル	62
	4.5.2 絶縁ロッドの強度解析	63
	4.5.3 絶縁ロッドの強度試験	64
4.6	結言	64
第5章	原子レベルモデリングによる界面接着強度の検証	66
5.1	緒言	66
5.2	古典分子動力学手法	67
	5.2.1 材料の力学特性の古典力学シミュレーション [76]	68
5.3	ニュートン力学的分子動力学法による接着強度の評価	69
	5.3.1 分子動力学手法によるはく離モードIの接着強度評価	69
	5.3.2 分子動力学手法によるはく離モード II の接着強度評価	75
	5.3.3 はく離の進展モードについて	78
	5.3.4 モードIの界面破壊エネルギーと接着強度指標との比較	81
5.4	実験と計算の比較に関する考察	82
	5.4.1 定量的な比較の検討	82
	5.4.2 計算と実験のスケール差の定量的な検討	83
5.5	結言	88

第6章	結論	89
6.1	本研究の結論	89
6.2	製品開発における本研究成果の位置付けと今後の展開	93
6.3	提案手法の将来の展望	93
付録 A		95
A.1	Wiener-Khinchin Theorem	95
A.2	有効接触面積	98
参照文南	λ,	99
研究業績		110
謝辞		112

図目次

1.1	24- kV vacuum-switchgear (SF ₆ -free environmental correspondence). $\ldots \ldots$	12
1.2	Flowchart of the thesis.	18
2.1	Heat curing processes of resins	22
2.2	Relationship between temperature and time	23
2.3	Volume change of epoxy in curing	23
2.4	Mechanical model for stress relaxation	26
2.5	Stress relaxation of epoxy resin. [91]	26
2.6	Stress in the cooling process . [91]	27
2.7	The mounting arrangement of distortion sensor	31
2.8	Circumferential strain variation in mold process	31
2.9	The test piece of liquefied resin	31
2.10	The test piece of solid resin	32
2.11	Deformation on the surface of resin	32
2.12	The interface between resin and metal	33
3.1	Comparison of resin material characteristic using Radar chart	37
3.2	Physical-properties measurement examination of epoxy resin . \ldots	38
3.3	Relation between tensile stress and strain : Static tension ${\rm test}(0.001~{\rm m/sec})$.	38
3.4	Relation between tensile stress and strain : Static tension ${\rm test}(0.01~{\rm m/sec})$.	39
3.5	Relation between tensile stress and strain : Impact-test(1.0 m/sec) . $\ldots \ldots \ldots$	39
3.6	Specification of element model	40
3.7	Experimental system	41
3.8	Enlarged view of experimental system	42
3.9	Test piece	42
3.10	Relationship between temperature and time	43

3.11	Axially symmetrical cross section	43	
3.12	Test piece for halfway test	44	
3.13	Relationship between shear forces and displacement	45	
3.14	14 Relationship between shear forces and displacement		
3.15	Relationship between maximum shear forces and pressure forces . \ldots	47	
41	Concept of test piece (Axially symmetrical cross section)	51	
4.2	Modeling of contact interface	52	
1.2	Analysis model (Non-linear spring)	55	
4.0	Flowchart of contact analysis	55	
4.4	Avially symmetrical areas section FEM model	50	
4.5	Padial strong distribution by FEM	50	
4.0	Dresses of contact analysis (Case of C1011)	59	
4.7	Contract analysis (Case of C1011)	-09 -09	
4.8	Comparison between measured and numerical-analysis results (Case of C1011).	00	
4.9	Comparison between measured and numerical-analysis results (Case of A1050).	61	
4.10	Comparison between measured and numerical-analysis results (Case of SS400).	61	
4.11	Comparison between measured and numerical-analysis results (Case of C1011).	61	
4.12	Axial symmetry model of air-insulated Rod	62	
4.13	Relationship between shear strain and displacement	63	
4.14	Breaking force 68kN	64	
5.1	Prediction of the adhesive strength of resin [76]	69	
5.2	Concept of interface fracture .	70	
5.3	Method for calculating adhesive fracture energy	71	
5.4	Molecular structure of crystalline-like resin	71	
5.5	Potential interatomic interaction .	72	
5.6	Potential intermolecular interaction	73	
5.7	Resin/copper interface structure obtained from molecular dynamics	73	
5.8	Resin/iron interface structure obtained from molecular dynamics $\ldots \ldots \ldots$	73	
5.9	Resin/aluminum interface structure obtained from molecular dynamics . \ldots	74	
5.10	The concept of a lattice mismatch	75	
5.11	Simulation model of Mode-II .	76	

5.12	Example of atomic configuration with displacement of 0.25 nm . $\dots \dots \dots$	76
5.13	Variation in energy at interface model due to applied displacement . \ldots	77
5.14	Surface profile (μm)	79
5.15	Resin/aluminum interface profile and its FEM analysis results . $\ldots \ldots \ldots$	80
5.16	Comparison of adhesive strength of experiment and simulation . \ldots	81
5.17	Surface roughness power spectra of aluminum cylinder	85
5.18	Relation between effective contact area and wave vector	87

表目次

1.1	History of epoxy casting insulated apparatuses [5]	10
1.2	Specification of Cubicle-type Vacuum Insulated Switch-gear	11
2.1	Setting-out item and setting-out conditions of mold process	29
3.1	Resin material characteristic list	37
4.1	Coefficients of friction and adhesion	57
4.2	Physical properties	57
5.1	Maximum shear force and interfacial pressure	78
5.2	Adhesive strength index and interfacial fracture energy	78

第1章 序論

1.1 研究背景

1.1.1 樹脂モールド構造とその特徴

樹脂材料は軽量で高強度の特性を持つことから、金属やセラミックを樹脂でモールドした絶縁 ロッドや絶縁容器などの絶縁体として電力機器に幅広く利用されている[1],[2]. エポキシ樹脂 モールド絶縁体は電力機器の小型化に貢献した技術の一つとして挙げられる.エポキシ樹脂は 熱硬化性樹脂の一種であり,その硬化反応プロセスは付加重合反応であるため,ガスなどの反 応副生成物がなく,ボイドなどの初期欠陥の発生が少ない高電圧絶縁に適した材料である[4].

国内におけるエポキシ樹脂モールド絶縁の利用は 1960 年代から始まり,表 1.1 に示すように, 初期は低圧の計器用変成器,遮断器,支持物,ブッシング等の絶縁被覆への適用が中心であった.1964 年には東海道新幹線車両用変圧器の高圧ブッシング, 1969 年には SF₆ ガス絶縁スイッ チギヤ (Gasinsulated switegear: GIS) に適用されている [3].

スイッチギヤは,電力の安定供給のために必要不可欠な系統の開閉,保護,監視,計測など の機能を備えた装置であり,ビル,工場,プラント,交通システムなどの受配電設備として幅 広い分野に利用されている.絶縁スペーサなどのモールド絶縁体は,液状あるいは固体を溶融 したエポキシ樹脂を型に流し込んで固化することで所定形状としている.モールド絶縁体は所 定の肉厚を有するため,硬化反応時の発熱,硬化収縮,およびそれらに伴い発生する収縮応力, 成形ひずみに留意する必要がある.これらの挙動は,樹脂,硬化剤,無機充填剤などの選択・ 配合により支配されるとともに,注型方法,注型樹脂量,注型絶縁物の肉厚,温度条件などに も依存している [4].

また, 近年の地球環境への配慮から SF₆ ガスの使用量削減が求められており, エポキシ樹脂 モールド絶縁をはじめとする固体絶縁や真空絶縁の重要度が増している.今後, エポキシ樹脂 による絶縁体が担う役割は大きくなっていくと推測される.

以上,樹脂モールド構造とその特徴について,樹脂モールド構造は軽量で高強度のと特徴から,電力機器の絶縁体としてのその役割が大きいことを述べた.

しかし,樹脂モールド構造を製作するときに樹脂層と材料の組み合わせによってモールド樹脂がひずみを受け,樹脂層のクラックや界面はく離を発生させる原因となったり,過酷な冷熱試験などでは大きな熱応力が発生して,樹脂層を破壊したりするので,目的とする形状,性能を備えたモールド構造を得ることが困難な場合が多いなど課題も多いのが現状である.

そのため製品の強度,安定性を保持する上で樹脂モールド構造の中に発生する応力関係を知る ことが必要である.特に電力機器に用いる樹脂絶縁体は,絶縁性能を確保するために樹脂と金属 間に強固な接着が要求される.その樹脂モールド構造の内部界面強度を正しく評価することに よって,電力機器の信頼性を向上させることができると考える.

Table 1.1: History of epoxy casting insulated apparatuses [5].

Year	Epoxy casting resin insulated electrical equipment	
$1955 \thicksim 1960$	Instrument transformer	
$1960 \thicksim 1965$	Insulator, Bushing, Magnetic blowout circuit breaker	
$1965 \thicksim 1970$	Submersible motor, Compact type substation	
1970 ~	SF_6 gas insulated compact type substation,	
	Solid insulated transformer	

1.1.2 樹脂モールド構造を用いた製品

樹脂モールド構造を用いた製品にはケーブル,絶縁ロッド,絶縁容器を含む絶縁開閉装置な どの電力機器以外にも自動車,通信,家電などに使用される電子部品など幅広く,電力機器へ の適用は年々拡大している.特にスイッチギヤの樹脂モールド構造の適用率は5割を越え樹脂 モールド構造に関する技術の開発は欠かせない.

現在,電圧 24/36 kV クラスのスイッチギヤの主流は,六フッ化硫黄(SF₆)ガスを利用した キュービクル形ガス絶縁スイッチギヤ(Cubicle-type Gas Insulated Switch-gear:C-GIS)であ る.SF₆ガスは極めて電気特性に優れ不燃性で安全なガスとして,電気絶縁用に幅広く使用さ れており,機器の小型化に大きく寄与している.その反面,地球温暖化係数(GWP)が二酸化 炭素ガス(CO₂)の約23900倍であり,1997年に開催された地球温暖化防止京都会議(COP3) において,排出抑制対象ガスに指定された.以来,SF₆ガスを削減した機器の研究開発が活発 に行われている [6].

このような背景から,SF₆ガスを全く使用せず,従来機種である C-GIS より小型・軽量化を 図った固体絶縁スイッチギヤ(Cubicle-type Solid Insulated Switch-gear:SIS)[7]や真空絶縁 スイッチギヤ(Cubicle-type Vacuum Insulated Switch-gear:VIS)[8]の開発が行われ,商品 化している.これらの環境型スイッチギヤの開発コンセプトは,SF₆ガスフリーによる環境調 和はもちろんのこと,変電所のリニューアルなどを考慮した小型・軽量化,省メンテナンス化, さらに,安全性,信頼性の向上である.VISの仕様を表 1.2,24 kV クラスの VIS の代表的な 構造を図 1.1 に示す.このクラスの遮断器は真空絶縁を適用した真空遮断器(Vacuum Circuit-Breaker:VCB)が主流であるが,近年,断路器にも真空絶縁を適用した真空断路器(Vacuum Disconnecting Switch:VDS)が採用されている.VCB や VDS を含む高電圧主回路部は,エ ポキシ注型樹脂でモールドによる真空絶縁の採用により,SF₆ガスフリーを実現している.

さらに,主回路構造を簡素化し,モールドしたエポキシ表面に外層シールドを施して相分離 することにより,小型・軽量化を図り,短絡故障の抑制と感電防止などの安全性を向上させた. また,VCB,VDSなどの操作機構は,従来から用いられてきた複雑な構成の電動ばね操作機構 に対して,永久磁石とソレノイドコイルを組み合せて構成したバランス型電磁操作機構(BMA) を開発し,機構部の部品点数を大幅に削減することで,信頼性の向上と省メンテナンス化が図 られている.環境調和,小型・軽量,省資源の観点でC-GISとVISを比較すると,SISは,SF6

Specification	VIS	
Rated voltage	7.2/12/24 kV	
Rated current	630/800/1,250 A	
A short-time permissible current	25 kV 3 sec	
Insulated medium	Vacuum + epoxy	
Insulated structure	Phase separation	
Operation machine composition	CB, DS, ES solenoid control(Greaseless)	
Mass	$650 \sim 750 \ \text{kg}$	
Size (height ${\pmb{\times}}$ depth ${\pmb{\times}}$ width) (mm)	2,000 × 1,300 × 600	
Notes-Abbreviation explanation CB (Circuit-breaker),		

Table 1.2: Specification of Cubicle-type Vacuum Insulated Switch-gear .

DS (Disconnecting Switch), ES (Earthing Switch)



Fig. 1.1: 24- kV vacuum-switchgear (SF₆-free environmental correspondence).

ガスフリーはもちろんのこと,質量半減,容積40%減,部品点数半減を実現している[9].

以上,樹脂モールド構造を用いる製品,特に樹脂モールド構造のスイッチギヤへの適用について述べた.

環境型スイッチギヤを支えるエポキシモールド樹脂スイッチギヤは,絶縁体としてばかりで なく主回路部を支える構造体としても主要な役割を担う.また,機器の小型・軽量化のために, エポキシモールド樹脂と線膨張係数が大きく異なるセラミックス(VCB, VDS に使用される 真空容器)や金属導体を直接モールドする必要があり,内部界面には複雑な挙動が起こると考 えられる.そこで,従来の材料に比べて機械特性,耐熱性,靭性を向上させた新しい樹脂材料 の開発の検討はもちろんのこと樹脂モールド構造の内部界面の強度評価技術の開発は不可欠で ある.

1.1.3 樹脂モールド構造の現状と課題

樹脂モールド構造の内部界面の評価技術の開発が最も必要とされる製品分野のひとつが半導体パッケージと言える.半導体パッケージの基本的な課題として,複数の異なる材料を接着接合した多層構造体であるため,半導体素子の動作発熱等による温度変動によって材料間の熱膨 張差に伴い熱応力が発生するという問題がある.特に半導体素子であるシリコン及びリードフ レームと,半導体素子を外部環境から保護するためのモールド樹脂と線膨張係数が大きく(一桁)違うため,熱応力発生に伴い接着界面にはく離が発生し,樹脂クラックや接合部の断線な ど致命的な損傷を引き起こす.

また,半導体パッケージの内部界面のはく離は直接半導体素子の電気的な動作に影響を与えないが,はく離端部は応力の特異点となるため,半導体素子の動作に伴う温度サイクル時の熱応力によって,樹脂のクラック発生やクラック進展が進み致命的な損傷の引き金となり得る[10-12]. 特に樹脂との接着界面の強度設計を定量的に実施することは異種材料構造,特にこのようなパッケージの構造設計上極めて根本かつ重要な課題となる.

電力機器に用いる樹脂モールド構造についても上記と同様な課題を抱えている.特に絶縁を目 的で使用する場合が多いことから,上記の課題に加え絶縁上の課題を解決しなければならない.

スイッチギヤの場合,絶縁容器の内部構造の電界特性を優先して構造が形成される特徴があ る.つまり,高電圧部と接地電位の距離が近いと電界が集中しやすいため,電界集中部付近は シールドなどの金属金具を用いるなど複雑に入り組んで形成される.また,材料間の線膨張係 数の差によるモールド後の熱収縮による変形によって応力集中が起き,き裂やはく離が発生し やすい.この結果,空隙が形成され絶縁性能が低下する.これは,空隙に硬化反応時の残渣や エポキシ樹脂に浸透していた空気や水分が出てきて,絶縁性能の低い気体充たされた状態とな るためである.

このような樹脂内部の界面はく離は,樹脂内部のボイドや構造の凹凸による影響で界面に接着されていない部分などが起点となりはく離が進展すると考えられる.Al₂O₃ 絶縁筒円面は樹脂との線膨張係数の差が大きいため,界面に加わる面圧が大きく接着強度の増加が期待できるが,C-VISの樹脂モールド内部構造は高い電圧が流れる銅導体,電気的な絶縁性能を確保するために用いるアルミニウムシールド,鉄締結部など多くの金属と樹脂間の界面が存在し,これらの界面におけるはく離抑制が大きな課題となっている.

特に,スイッチギヤの容器に樹脂モールド構造を用いる場合は,スイッチギヤの機能である 開閉動作の際に樹脂と金属間界面に加わる衝撃や振動により,はく離進展につながる恐れがあ る.今までははく離が生じても絶縁性能が確保出来るように金属の表面に導電性塗料を用いて 界面処理を行っている.しかし,導電性塗料による界面処理は導体や容器の形状が複雑である ことから作業性が悪く,コスト増加につながる.したがって,樹脂モールド内部の界面接着強 度の評価技術を確立させて導電性塗料レスの界面構造の検討が必要である.

さらに,樹脂モールド構造の製品への適用動向は,自動車の場合,エンジン直接搭載等による使用環境の苛酷化,小型・軽量化による高電圧化・機能向上・複雑化によるモールド領域の

微小化・薄肉化等,より一層厳しくなっているのが現状である.

以上,樹脂モールド構造の現状と課題について,異種構造体である樹脂モールド構造の内部 界面には応力集中によるはく離やクラック発生の可能性が高いこと,電気的な絶縁性能を確保 するためには樹脂モールド構造の内部界面に強い接着が要求されること,樹脂との接着界面の 強度設計を定量的に実施することが異種材料構造の設計上極めて根本かつ重要な課題となるこ とについて述べた.

1.1.4 樹脂モールド構造の内部界面強度評価技術の現状と課題

樹脂モールド構造を用いる半導体パッケージ分野の構造設計では樹脂接着界面のはく離発生 を許容した強度設計が行われてきた.すなわち,接着界面のはく離が発生した場合でも,そのは く離端からのパッケージクラックを防止する設計であるため,界面評価手法よりも界面破壊の 原因究明の研究が活発に行われてきた.西村ら [13,14] はパッケージクラックがチップ,リード フレーム,封止樹脂相互界面はく離によるものと推定して,温度サイクル環境下でのパッケー ジクラック発生メカニズムを示している.この中でも,パッケージクラック発生は,パッケー ジ構成材料間の界面はく離が重要な原因の一つであると言及している.他にもクラック研究に よる結果 [15–17,17–25] が種々の構造損傷の原因なっている事を示している.これらの原因究 明から示したクラックの発生メカニズムに基づいて,モールド樹脂の破壊靭性値及び疲労き裂 進展速度測定し,温度サイクル環境下でのき裂進展挙動の予測値が実験値とほぼ一致すること を示している [10,11,26–32].

半導体パッケージのような異種接着界面への線形破壊力学の適用については,通常の均質材 中のき裂と異なり,そのき裂先端では正負に大きく振動し振動時の特異応力が生じ,き裂面側 では振動 Overlapping が生じることが知られており,古くから多くの報告 [10,33–36] がなされ ている.ただし,この振動特異応力はき裂先端のごく近傍に限られた現象であるので,実際の 適用においては無視できるのものと考えられている.その一方,この振動現象は,き裂面の接 触により実際は生じないとする新たなモデルが提案されており [37–42],現在の考え方として, 上記の二つのグループに大別されている状況にある.このような理論的な混乱に対して,結城 ら [43–46] は,Hetenyiの基本解を用いた効率的な境界要素解析プログラムを開発し,厳密解の わかっている無限板中の界面き裂について,振動応力の発生するき裂先端を避けてき裂先端か ら少し離れた所の安定な解を用いて外挿により応力拡大係数を求める方法を提案し,厳密解と 一致する高精度な解が得られることを明らかにしている.また,佐藤ら [47,48] は,境界要素解 析を実施し,半導体パッケージ内部の樹脂とダイパット間の接着界面における応力拡大係数と き裂長さとの関係について検討している.さらに,池田らは [49,50] 仮想き裂進展法の概念を 導入することで,はく離進展も考慮した樹脂とダイパット間の接着界面の応力拡大係数とき裂 長さとの関係について明らかにしている.

以上,異種接着界面の強度評価技術において,薄い接着材層の場合のように残留応力の影響 が無視できる場合では,破壊クライテリオンを上記で述べたような破壊力学パラメータで表す ことによって普遍的な接着強度が得られていることを述べた [51-64]. このように,従来の機械や 構造物の設計は,引張り強さや降伏点に適当な安全率を加味した許容応力を基礎として行われ ていた.しかし,き裂が関与する破壊の問題に対してはこの方法は適用できず,強度ならびに 破壊を支配するパラメータの抽出が必要であった.後に,均質材のき裂端における応力場は特 異性を示し,その時には応力拡大係数やき裂解放エネルギが強度を評価する上での重要な因子 であることが理論的に明らかにされ,これらは破壊力学として高度に体系化されてきた.その 後,この力学は実験的にも明らかにされ,破壊靭性値等の材料の破壊を決定するクライテリオ ンの基礎となっている.

一方,従来の力学は均質材に対して行われてきたものであるが,近年の各種産業分野(宇宙 機器,原子力機器,電子機器,航空機,自動車など)で用いられる構造部材は,ほとんどが界 面の存在している異材ないしは複合材であり,破壊の発生や強度低下の原因はほとんどが界面 端ないしは界面に到達しているき裂端を起点としている.よって,界面が存在している部材の 力学特性を明らかにする必要があるが,界面強度,き裂が進展する経路,そして残留応力等の 問題が複雑に絡み合い,強度を評価する上での破壊力学的なクライテリオンが確立していない.

そして,界面の力学特性を明らかでないまま,多くの構造部材に使用されているのが現状で ある.しかし,破壊の指標となるクライテリオンを明確にしなければ,実際に複合化された構 造物のき裂の成長挙動と破壊に至る過程を定量的に扱うことができない.そのため,実際の構 造物中に非破壊検査法等によってき裂を発見しても,このき裂がその後の外力や熱変動あるい は環境の影響等により不安定破壊を引き起こすか否か,安定破壊であればどのくらいの使用期 間に耐えうるかを予測することはできず,構造物の信頼性評価ができない.

特に 1.1.3 で示した課題を持つ樹脂モールド構造の金属と樹脂間の界面には,摩擦力と接着 力および残留応力による面圧が作用し,これらの力が樹脂モールド構造全体の挙動に大きな影 響を与える.そのため,樹脂モールドのように界面をもつ構造の設計には,これらの力をすべ て考慮した強度評価手法が必要である.しかしながら,3軸応力状態における樹脂モールド構 造の界面の力学特性についてはまだ不明な点が多く,通常は,異種材料間を共有節点にする界 面を考慮しない固着モデルを用いるか,または,摩擦力のみを考慮し解析を行うことが多い. 摩擦力を考慮した界面の接触問題を解析する方法としては,ペナルティ法 [65] や拡張ラグラ ンジェ法が広く用いられている [66-69].しかし,樹脂モールド構造のような界面に摩擦力と接 着力および残留応力による面圧が複合して存在する問題には適用できない.

このような問題に対して,損傷力学に基づき,界面の損傷とはく離を統合させた Cohesive zone model に関する研究が数多く行われている [70–74]. しかしながら, Cohesive zone model はモデルの複雑さにより汎用的なモデルには至っていないのが現状である.

今後の構造物の多くは界面が存在したものとなり, さらに多数の界面が存在している複合材 料や電子デバイス等の使用が大いに期待できることから,産業の発展は上記に示した界面力学 からの破壊のクライテリオンの解明に掛かってくる.均質材のき裂端における応力場が理論的 に明らかにされ,実験的に確認され,破壊力学と言う新たな力学が生まれ,多くの産業分野に 寄与しているように,3軸応力状態における樹脂モールド構造の界面の力学特性についても理 論的に明らかにし,ナノスケールの化学結合とマクロスケールのはく離強度の関わり合いを考 慮した界面力学なる新たな力学を体系化し,樹脂モールド構造の内部界面強度が正しく評価で きる手法の提案が重要である.

1.2本論文の目的と構成

電力機器に用いる樹脂絶縁体は,絶縁性能を確保するために樹脂と金属間に強固な接着が要求される.その樹脂モールド構造の内部界面強度を正しく評価することによって,電力機器の 信頼性を向上させることができる.

そこで本研究は,樹脂モールド構造の内部界面強度を正しく評価するために,樹脂モールド 構造の金属と樹脂間の界面強度に関する実験的な検討により界面の接着特性を求め,界面挙動 をモデル化し,解析モデルに反映することで樹脂モールド製品における界面強度の評価手法を 構築する.また,計算による界面接着強度評価手法を検討するために,界面接着強度を表すひ とつの指標として,界面結合の解離を扱う原子レベルモデリングにより求められる「界面破壊 エネルギー(Interfacial fracture energy)」を定義する.さらに,内部接着界面のメカニズムと 接着界面強度の支配因子を把握するために,検討手法を Cu,Fe,Alの三種類の材料とエポキシ 樹脂間の界面に適用し,ミクロレベルのはく離実験により得られた界面の接着強度指標とナノ レベルの分子動力学法の計算により得られた界面破壊エネルギーとの定性的な比較を行い,ナ ノスケールの化学結合とミクロスケールの界面接着強度の関わり合いについて,主に表面粗さ の影響 [28,75,77-82,82-89] に着目しながら考察する.

本論文の構成は,本章を含め,全6章から構成される.以下に各章の概要を示す.

本章では本研究の背景と目的について製品的需要と工学的技術の背景に基づき紹介している.

第2章では,樹脂モールド構造の界面生成のプロセスを把握するために,はく離実験に用いる試験体のモールドプロセスを通してモールド時に界面に働く力や樹脂層に発生する応力を明らかにする.また,インサート金属の表面状態や,樹脂と金属が一体化された界面状態の観察によりプロセス時の界面における樹脂の挙動を明らかにする.

第3章では,樹脂モールド構造の内部界面に作用する力を把握するために,第2章のモール ドプロセスによって製作した試験体を用いて,試験体の内部接着界面のはく離実験を行い,金 属と樹脂間の接着界面に生じるせん断力を測定する.また,樹脂モールド構造の金属と樹脂間 の界面に作用する摩擦力と接着力および面圧力と測定せん断力との関係を確認し,これらの力 が樹脂モールド構造全体の挙動に及ぼす影響を検討する.

第4章では,第3章の実験により求めた金属製の円柱と樹脂間のせん断力を用いて,新たに 定義する接着強度指標により三つの力(摩擦力,接着力,残留応力による面圧)に分解し,界面 に作用する力のモデル化を行い,分解した力を法線方向と接線方向に非線形ばねを使った単純 モデルでモデル化する.また,そのモデルを用いて接着・摩擦有限要素解析手法を提案し,提案 手法の妥当性の検討さらに,界面の特性を再現できることを示す.また,樹脂モールド構造の 内部界面の接線方向はせん断ばね(接着強度指標を用いるせん断力によるばね定数)とし,法 線方向は垂直ばね(樹脂のヤング率から求まるペナルティ剛性によるばね定数)とするモデル 化を行うことで,実機部品である絶縁ロッドの破断強度試験をシミュレーションできることを 示す.

第5章では,第4章の接着・摩擦有限要素解析手法の提案に対する考察として,マクロレベルのはく離実験の界面特性により得られた接着強度指標に相当する界面の接着強度を計算で求めることを検討する.さらに,界面接着強度を表すひとつの指標として,界面結合の解離を扱う原子レベルモデリングにより求める界面破壊エネルギー(Interfacial fracture energy)を定義する.また,内部接着界面のメカニズムと接着界面強度の支配因子を把握するために,ナノレベルの界面破壊エネルギーとマクロレベルの接着強度指標との定性的な比較を行い,ナノスケールの化学結合とミクロスケールの界面接着強度の関わり合いについて,主に表面粗さの影響[28,75,77-82,82-89]に着目しながら考察する.

第6章は,結論であり,本研究の成果を概活的に述べ,製品開発における本研究成果の位置 付けや今後への展開について概説する.

1.2.1 本論文の構成

本論文の構成を図 1.2 に示す.



Fig. 1.2: Flowchart of the thesis.

第2章 樹脂モールド構造のプロセス

2.1 緒言

電力機器には鉄心や導体などが樹脂に埋め込まれるものが多く,このインサート材と樹脂層 との組み合わせによってはモールド時の収縮により樹脂層がひずみを受け,クラックやはく離 の発生原因となる.また,過酷な冷熱試験などでも大きな熱応力が発生して,応力集中による 樹脂層のクラックや界面のはく離が発生する.この結果,空隙が形成され絶縁性能が低下する. 絶縁性能の低下の理由は空隙に硬化反応時の残渣やエポキシ樹脂に浸透していた空気や水分が 出てきて,絶縁性能の低い気体で充たされた状態となるためである.樹脂層のクラックや界面 でのはく離によって,目的とする形状,性能を備えたモールドを得ることが困難な場合が多い. そのため樹脂モールド製品の強度,安定性を保持する上にモールド品の中に発生する応力関係 を知ることが必要である.

そこで本章では,樹脂モールド構造の界面生成のプロセスを把握するために,はく離実験に 用いる試験体のモールドプロセスを通してモールド時に界面に働く力や樹脂層に発生する応力 を明らかする.また,インサート金属の表面状態や,樹脂と金属が一体化された界面状態の観 察によりプロセス時の界面における樹脂の挙動を明らかにする.

本章の構成を以下に示す.

緒言

- 樹脂モールド試験体の界面生成プロセス
- モールド樹脂層に発生する応力
- 熱変形量の測定
- 結言

2.2 樹脂モールド試験体の界面生成プロセス

樹脂モールド構造の試験体の界面生成プロセスを確認するため,試験体の製作を行う.試験 体には金属円柱(直径37mm,高さ27mm)をインサート材として挿入でき,樹脂の厚さが 10mmになるように製造した金型を用いる.

製作方法は,次の項目の順で行う.

- (1) 表面の汚れを取るために,金属円柱を石鹸で洗浄,乾燥した後,アセトンで洗浄する.
- (2) 金型に離型剤を塗布し,室温で約30分間乾燥させた後,図2.1(a)に示すように,金属円
 柱を金型にセットし70 で4時間予熱を行う.
- (3) 樹脂の低粘度化を図るために,図 2.1(b) に示すように液状の主剤および硬化剤を 70 で 予熱し,樹脂を調合する.
- (4) 図 2.1(c) に示すように,あらかじめ金属円柱を挿入した金型中に,液状のエポキシ樹脂 を室内大気圧にて注入する.
- (5) 図 2.1(d) に示すように,真空タンクにて 0.5 Torr 以下に保持しながら図 2.1(e) に示すように真空脱泡を行う.
- (6) 図 2.1(f) に示す高温槽に入れ,モールドを行う際の炉の設定条件を,一次硬化温度 85
 で7時間保持し,二次硬化温度 130 で 24 時間保持後,7 /hour で常温(20)まで
 冷却させ,完全離型させる.図 2.2 にモールドプロセス中で測定した樹脂中の温度を示す.

上記の樹脂モールドプロセスの中でのエポキシ樹脂モールドの温度変化による体積変化は図 2.3 にような挙動を示すと考えられる [90,91].図2.3 に示す第1の硬化過渡の実際の挙動は複 雑であり,製品性能の硬化条件依存性が極めて高いと考えられるが,一般的なエポキシ硬化過 渡の体積変化は,加熱による温度上昇で,液状状態で熱膨張し,硬化反応により樹脂の2次元 的架橋が始まり,体積収縮を伴いながらゲル点に到達すると考えられている.エポキシ樹脂は 固体としての挙動に移行し,ここから3次元的架橋に移り,これの終点である硬化点に到達す る.さらに,高温から冷却過程を経て,室温に戻る.

ゲル化点から硬化点に至る過程の体積変化が硬化内部ひずみとなり,特徴として,この硬化内部ひずみは硬化工程条件により大きく異なるため,硬化工程設定には多大な工数がかかり,また,許容公差・余裕度把握も極めて困難である.このように熱硬化型エポキシ樹脂は温度上昇による硬化反応で金属円柱と樹脂が一体となり金型から離型され,図2.1(f)の試験体が製作され

る.図3.10はモールド時に測定した樹脂中の温度を示す.硬化時の最大温度差は110 で,最 高温度は130 である.また,用いたエポキシ樹脂のガラス転移温度は140 であるので,ガ ラス転移温度付近で生じる樹脂の粘性特性による影響は少ないと考えられる.

以上のように樹脂モールドのプロセスの中で受ける熱負荷によって起こる体積収縮は残留応 力として界面に加わることになる.また,液状状態と固体状態でのそれぞれの界面における樹 脂の挙動は異なると考えられる.

2.3 モールド樹脂層に発生する応力

モールド樹脂と金属との組み合わせについて考えるとき,両者の物理的性質の差によって種々の大きさの内部応力が誘起される.応力の発生に関係すると思われる項目は以下に挙げられる [90,91].

- 樹脂が硬化するときに起こる体積変化, すなわち硬化収縮率
- 樹脂と金属の熱膨張係数の差異によるひずみに起因する熱応力
- 金属およびモールド体の形状

特に,モールド品のクラック発生に関して一番問題となることは,過酷な冷熱の繰り返しに よる熱応力の影響である.これを避けるためには,冷熱の変化を与えた時のモールド内部の温 度分布,熱の移動速さをあらかじめ確かめ,応力の発生状態について充分検討する必要がある. 一方,高分子材料であるモールド樹脂には,上記の要因で発生した応力を緩和する性質がある. この応力緩和は樹脂中の温度分布や熱の移動速さによっても大きく影響されることが考えられ, 発生する残留応力として考える.樹脂モールド構造で扱う残留応力を用いたモールド品内の樹 脂強度(*o*total)の単純な考え方として式(2.1)の関係がある[91].

$$\sigma_{\text{total}} = \sigma_{\text{f}} - (\sigma_{\theta} + \sigma_{\text{s}} - \sigma_{\text{a}}) \tag{2.1}$$

ここで, σ_{f} は静的樹脂の強度, σ_{θ} は発生した熱応力, σ_{s} は樹脂の硬化収縮による応力, σ_{a} は 樹脂層に発生した応力緩和量をそれぞれ示す.

したがって,モールド時樹脂層に残存する残留応力 σ_{pm} は次の式(2.2)となる.

$$\sigma_{\rm pm} = \sigma_{\theta} + \sigma_{\rm s} - \sigma_{\rm a} \tag{2.2}$$

また,樹脂層に発生する熱応力 σ_{θ} は次の式(2.3)となる.

$$\sigma_{\theta} = \triangle \alpha \cdot \triangle t \cdot E_{\text{resin}} \tag{2.3}$$



(a) Preheating at 70 for 4 hours



(c) Resin pouring 70



(e) Bubble removing



(b) Mixture of liquid resin



(d) Holding to 0.5 Torr with vacuum vessel



(f) First curing at 85 for 7hours, Second curing at 130 for 24hours

Fig. 2.1: Heat curing processes of resins .



Fig. 2.2: Relationship between temperature and time .



Fig. 2.3: Volume change of epoxy in curing .

ただし, $\Delta \alpha$ は異種材料間の熱膨張張係数の差, Δt は樹脂層の温度変化, E_{resin} は樹脂の温度によって変化する樹脂層の弾性率をそれぞれ表す.また, Δt は冷熱の変化を受けている時の材料熱容量に関するもので,次式で表される.

$$\Delta t = \sigma(t_{\rm c}) \cdot (C)^{-1} \cdot \lambda \tag{2.4}$$

ここに, t_{c} は樹脂層の厚み,Cは樹脂の比熱, λ は樹脂の熱伝導率をそれぞれ表す. また,樹脂の硬化収縮によるひずみを ϵ_{x} とすると,応力は次の式 (2.5) で求められる.

$$\sigma_{\rm s} = \epsilon_x \cdot E_{\rm resin} \tag{2.5}$$

一方,モールド樹脂のような高分材料は急激な変形に対しては弾性体として挙動するが,徐々に力を加えれば粘性流動する性質がある.つまり,固体状態では弾性率 (E_{resin}) とし液状状態では粘性 (η) で取り扱われるので,樹脂に外力が加えられたとき,違う性質が重畳した挙動をする [90,91].熱硬化性樹脂は弾性項(E_1 , E_2) と粘性項 (η) からできているとして,高分子材料の粘弾性の取扱いをすれば,その応力緩和 σ_a は次式のようになる.

$$\sigma_{\rm a} = \frac{E_1}{E} (\sigma_{\theta} + \sigma_{\rm s}) e^{-\frac{E_1}{\eta} \cdot t} + (\sigma_{\theta} + \sigma_{\rm s}) \frac{E_2}{E}$$
(2.6)

したがって,式(2.1)~式(2.6)を総合すると次の式のようになる.

$$\sigma_{\text{total}} = \sigma_{\text{f}} - \Delta \alpha \cdot \sigma(t_{\text{c}}) \cdot (C)^{-1} \cdot (\lambda) \cdot E_{\text{resin}} - \epsilon_{x} \cdot E_{\text{resin}} + \frac{E_{1}}{E} (\sigma_{\theta} + \sigma_{\text{s}}) e^{-\frac{E_{1}}{\eta} \cdot t} + (\sigma_{\theta} + \sigma_{\text{s}}) \frac{E_{2}}{E}$$
(2.7)

式 (2.7) で示すモールド樹脂に発生する応力は,樹脂の弾性率の温度依存性,熱膨張係数,比熱,熱伝導率,熱変形温度,応力-ひずみ曲線,樹脂の収縮率,樹脂中の温度分布,組み合わせ形状効果などの設計因子が関わって決定される.つまり,モールドというプロセスにより製作される製品には必ず残留応力が存在するということになる.また,冷熱などでクラックやはく離が生じない製品は式 (2.7) の σ_{total} が負値ではないことから,外部応力が σ_{total} 以上になる環境では使用できないことを意味する.

このような残留応力の一要因となっている樹脂の収縮率に関して,一般に充てん剤なしのポ リエステル樹脂は8~10%でエポキシ樹脂は4~6%と言われている[91].

モールド製品では樹脂の収縮率が大きいほど(すなわち変位量が大きい場合)発生する応力 は(変位量×樹脂弾性率)大きくなるため,この発生応力を小さくする必要があり,樹脂の収 縮率あるいは樹脂の弾性率を小さなものにしなければならない.樹脂の収縮率を小さくするの に,一般にモールド樹脂に充てん剤を添加してその効果を期待する場合が多い.つまり,エポキ シ樹脂の中に充てん剤の添加量の多ほど体積収縮率が小さくなることが示されている.しかし, 樹脂に充てん剤を添加すると逆に弾性率が増大する傾向である.したがって応力(変位量×樹 脂弾性率)が充てん剤の添加量増加によって必ずしも軽減されるとは限らない.ただし,収縮 後は一定の高温状態で24時間以上置くことになるので,収縮時の応力はほとんで緩和されると 考えられる.

次に,熱硬化型エポキシ樹脂モールド品は比較的高温100 以上で樹脂を硬化させ製品を作 成する.したがって硬化後のモールド品は高温から室温に戻される.このときの熱負荷によっ てモールド樹脂中に熱応力が大きく発生することになる.その他に過酷な冷熱試験や使用状態 中に受ける温度負荷に対しても同様にモールド樹脂層が熱応力の繰り返しを受ける.この熱応 力がモールド品の樹脂層にクラックやはく離を発生するに至るような大きな応力値となる.熱 応力そのものは中心のインサート材が壁となり温度負荷に対して,インサート材の直径に変位 が生じないとしたとき,異種材料間が密着もしくは接着して自由変形を拘束する.樹脂と金属 の組み合わせの応力への影響を考慮すると式 (2.8) で示した熱応力が生じる.

$$\sigma_{\theta} = \Delta \alpha \cdot \Delta t \cdot E_{\text{resin}} \tag{2.8}$$

通常,樹脂の硬化収縮,熱応力によって,生じる応力を単純な平面応力として扱う場合が多い. しかし,実際のモールド品の樹脂部は単純な平面応力状態であることは少なく,構造的には常 に3軸応力状態におかれた場合が多いので,平面応力値よりも数倍大きな応力の発生すること が予想される.モールド樹脂の場合,引張応力は約70~100 MPa ほど生じるため,過酷な冷熱 試験などを行ったときのクラックを防ぐことはとても難しい.しかしながら,これらのモール ド樹脂は負荷状態が一定で続くと発生応力を緩和してくれる性質がある.高分子物性では応力 緩和と称していくつかモデルの単純化を行っている.

熱負荷により樹脂層に発生する応力緩和の度合については図 2.4 に示す関係がよく用いられている.図 2.4 のように応力の緩和は時間によって初めは急速に低下し、時間の経過とともに緩やかに応力が低下して行く. e_0E_1 は一定ひずみ e_0 に対する $E_2\eta$ の重畳した作用による応力の緩和を示すものであるが,一般にエポキシ樹脂のように熱硬化性樹脂では,図に示す e_0E_1 に相当する応力が樹脂中に残存する.

図 2.5 はエポキシ樹脂について,試験片に一定のひずみを与えて発生した応力の経時的な挙動について,温度との関係について示したものである.温度が高い程応力の緩和速さが早いことが示されている.



Fig. 2.4: Mechanical model for stress relaxation .



Fig. 2.5: Stress relaxation of epoxy resin. [91]



Fig. 2.6: Stress in the cooling process . [91]

これは図 2.4 の *e*₀*E*₁ に相応する部分にあたり,この応力緩和して行く挙動についてのみ取扱 えば次の式(2.9)で表される.

$$\sigma = \sigma_0 e^{-\frac{t}{\tau}} \tag{2.9}$$

ここで、 σ_0 は初期応力を示し、 $\tau = \frac{\eta}{E_1}$ は緩和時間でを表し、初期に発生した応力 σ_0 が一定温度では、時間の経過とともに小さくなることを示す、また τ は、次の式 (2.10)で表される、

$$\tau = \mathbf{A}' e^{\frac{U}{RT}} \tag{2.10}$$

式 (2.9),式 (2.10) を近似化して扱えば

$$In\frac{\sigma}{\sigma_0} = -\mathbf{A}''(1-\frac{\mathbf{B}}{T}) \cdot t \tag{2.11}$$

ここで, A["],B は材料によって定まる定数で温度が高いほど,応力緩和が早くなる.また T_g 以下の温度域では応力が緩和するのに時間がかかるので徐冷する必要がある.図 2.6 は一定の 徐冷速度で樹脂を冷却した場合,急冷した場合に比べて樹脂の中に発生する応力値にどれくら い差異があるかを示したものである.この値は,冷却速度1 /15分で徐冷した場合の値を用 いて求めたもので,急冷した場合に比べ発生した応力値が小さくなることを示し,樹脂層に残 存する残留応力と考えられる. さらに,樹脂はインサート材との組み合わせによる形状によってその強度は異なって来る.特 に電機機器は鉄心や,導体(銅など)をインサート材として使用する例が多く,このような金 属には角が存在し,角に当たる部分に応力の集中を受け,クラックやはく離の発生起点になる 可能性が大きい.したがって,角の樹脂層が薄くならないように注意しなければならない.つ まり,引張方向の応力に対する樹脂層の変位を考慮すると,外周樹脂部の伸び変位と同じだけ 先端部が伸び変位を受け,樹脂層が薄いものほど大きいな応力値となり,破壊が先端部より始 まることになる.この樹脂層の集中応力に対し,応力を分散させるだけの樹脂層が存在しない とクラックが生じ易いことになるので角に当たる部分には丸みをつけて,丸みを相当する部分 の樹脂層に応力の分散を図る.

以上,樹脂層に発生する熱応力の種々の物理要因を考慮した残留応力について述べた.樹脂 層の残留応力は,クラックやはく離のない実用価値のあるモールド品を製作するための重要な 要素を含んでいる.一般にモールド品を作成するときにモールド樹脂の引張強度,曲げ強度,曲 げ弾性率など静的強度を主に考えているが,モールド品の多くは異種材料の組み合わせなのた め,構造的な要因を加味した上で樹脂の硬化過程,冷却過程における樹脂層の応力挙動と樹脂 強度の関係を検討する必要がある.樹脂モールド構造は樹脂層が発生応力に耐えられるように あらかじめ検討した結果に基づいて製作する必要がある.

2.4 熱変形量の測定

前節で述べた熱応力発生のメカニズムに基づき,モールドプロセスの中での熱変形量の測定 を行う.図2.7に示すようにインサート材の表面円周方向にひずみゲージを固定し,ケージの 測定部(表面)を樹脂側となるようにひずみゲージ裏とインサート材はシリコンゴムにより仮 留めする.その後,樹脂を流し込んで硬化過程に進む.表2.4に熱ひずみ測定のためのモール ドプロセス進行過程をまとめて示す.モールドプロセスの中で硬化反応により体積変化や樹脂 に加わる熱負荷よるひずみを測定し図2.8に示す.図2.8は測定した円周方向ひずみと時間との 関係と,樹脂内部温度と時間との関係を共に示す.図2.8に示すように1次硬化反応が生じる 85 で圧縮方向にひずみが発生する.その後130 への温度増加にしたがって熱膨張によりひ ずみが引張に転じ130 で2次硬化反応が生じると再びひずみは圧縮方向に発生し,130 一 定で24時間放置すると応力緩和によるクリープひずみが発生する.その後7 /hの徐冷で常 温に戻す際,圧縮方向に熱ひずみが発生する.

まとめると1次硬化および2次硬化での硬化反応によるひずみは,クリープひずみの発生に よりリセットされ,残留応力として残るひずみは,主に徐冷で常温に戻す際に発生する熱ひず

Process	Setting-out item	Preset value
1.Resin preheating	Temperature	70 ± 5
	Time	4 h over
2.Metallic mold preheating	Temperature	85 ± 5
	Time	2 h over
3.Resin mixture	Churning Time	$10 \min$
4.Mold	Pouring time	$3{\sim}15~{\rm min}$
5.Defoaming	Time	$5 \mathrm{min}$
6.Primary curing	Temperature	85 ± 5
	Time	6.5 h
7.Secondary curing	Temperature	130 ± 5
	Time	24 h
8.Slow cooling	Temperature	$130 \longrightarrow 20$
	Time	24 h

Table 2.1: Setting-out item and setting-out conditions of mold process .

みであることがわかる.これら内部界面挙動に加えて,熱変形による影響を確認するために液 状状態での樹脂と固体状態での樹脂の変形を確認する.図2.9 は樹脂を流し込んだ直後の試験 体を示し,樹脂上部表面は樹脂がほぼインサート材の角部下まで注入されていることがわかる. それに対して,硬化後に離型され固体状態で徐冷によって熱変形を受けた後の試験体を図2.10 に示す.図2.9 と図2.10の写真を比較してみると,図2.10の方は樹脂上部のへこみが大きく見 受けられる.

図 2.10 のへこみ量を Laser autofocus (Mitaka 製 Non-contact 3D, 2D measuring system) を用いて測定した.その結果を図 2.11 に示す.図 2.11 は 3 種類の金属 (Al, Cu, Fe) に対す るへこみ量を傾きなどの修正のために平坦面が続き金属中心の上部から樹脂端部まで測定した へこみ深さを示す.深さは零を基準としてへこみ量の増加に伴い負の方向に増加する.金属の 端部の丸みの R と図 2.9 の初期構造を考慮して,熱変形によるへこみ深さは Al, Cu, Fe, そ れぞれ 0.12 mm, 0.14 mm, 0.16 mm である.理論計算による熱変形量 (線膨張係数の差×温 度差×金属円柱軸方向距離)は Al, Cu, Fe, それぞれ 0.10 mm, 0.12 mm, 0.13 mm でほぼ 同じである.つまり,図 2.8 のプロセス中のひずみ変化が示すように,2次硬化時に十分な時間 をかけて硬化収縮時の変形を緩和させることで,徐冷時の熱応力のみを考慮して設計すること が可能であることを示している.ただし,今回のモールドプロセスの挙動は,用いた樹脂の Tg 以下での温度負荷を考慮しているが,Tg 以上の温度負荷の場合は今回と違うモールドプロセス の挙動が生じると考えられる.

また,製作した試験体の樹脂と金属間の界面をマイクロスコープにより100倍拡大で測定し た写真を図2.12に示す.図2.12からは金属表面に切削痕のような周期的ラフネスが存在するこ と,樹脂がそのラフネスに沿って流れ込んで固まっていることがわかる.しかし,円周方向に 沿った樹脂と金属間の界面隙間は観察が難しく確認は困難である.液状樹脂は樹脂成分の分子 レベルのラフネスまで流れ込むが,その後の固体状態では0.1 mm レベル熱変形を受けるため に部分的はく離が存在する可能性は否定できないと考えられる.



Fig. 2.7: The mounting arrangement of distortion sensor .



Fig. 2.8: Circumferential strain variation in mold process .



Fig. 2.9: The test piece of liquefied resin .



Fig. 2.10: The test piece of solid resin .



Fig. 2.11: Deformation on the surface of resin .



Fig. 2.12: The interface between resin and metal.

2.5 結言

樹脂モールド構造の界面生成のプロセスを把握するために,はく離実験に用いる試験体のモー ルドプロセスを通してモールド時に界面に働く力や樹脂層に発生する応力を明らかにした.ま た,インサート金属の表面状態や,樹脂と金属が一体化された界面状態の観察によりプロセス 時の界面における樹脂の挙動を示し,得られた結果は以下に整理される.

- (1) 樹脂の体積変化と温度変化の関係から考えられる熱硬化型エポキシ樹脂の硬化過渡は,加熱による温度上昇で,液状状態で熱膨張し,次に,硬化反応により樹脂の2次元的架橋が始まり,体積収縮を伴いながらゲル点に到達する.エポキシは固体としての挙動に移行し,ここから3次元的架橋に移り,これの終点である硬化点に到達する.さらに,冷却過程を経て,室温に戻る.
- (2) 樹脂層に発生する応力は樹脂が硬化するときに起こる体積変化によるもの(硬化収縮率による応力)と樹脂と金属の熱膨張係数の差異によるひずみに起因する熱応力および,金属とモールド体の形状による応力集中などが存在する.
- (3) モールド製作プロセスの中で液状樹脂から固体樹脂までの硬化過程をひずみセンサーに より測定した結果,1次硬化および2次硬化における硬化反応によるひずみはクリープひ

ずみの発生によりリセットされ,残留応力に起因するのは主に徐冷で常温に戻す際に発生 する熱ひずみであることを明らかにした.

- (4) 熱変形による影響を確認するために液状状態での樹脂と固体状態での樹脂の変形を測定した結果,熱変形によるへこみ深さはAl,Cu,Fe,それぞれ0.12 mm,0.14 mm,0.16 mm であり,理論計算による熱変形量(線膨張係数の差×温度差×金属円柱軸方向距離)はAl,Cu,Fe,それぞれ0.10 mm,0.12 mm,0.13 mm でほぼ同じであることが確認できた.
- (5) 樹脂と金属の接着界面観察により金属表面に切削痕のような周期的ラフネスが存在する ことと、樹脂がそのラフネスに沿って流れ込んで固まっていることがわかった.しかし、 円周方向に沿った樹脂と金属間の界面隙間は観察測定が難しく確認は困難である.液状樹 脂は樹脂成分の分子レベル大きさと同じレベルのラフネスまでは流れ込むと考えられる が.その後の固体状態で徐冷により常温に戻す際に発生する 0.1 mm レベル熱変形によっ て,部分的なはく離の可能性を示した.

第3章 樹脂モールド構造の内部接着界面のはく 離実験

3.1 緒言

樹脂モールド構造における内部界面強度評価技術の確立のために,第2章で述べた内部接着 界面生成プロセスと樹脂モールド時に加わる熱変形による残留応力の把握に加えて,樹脂モー ルド構造の内部接着界面強度の把握が必要である.本章のモールドプロセスにしたがって製作 した試験体を用いて,試験体の概要と内部接着界面のはく離実験方法を説明する.その後,内 部接着界面のはく離実験を行い,金属と樹脂間の接着界面に生じるせん断力を測定する.

樹脂モールド構造の金属と樹脂間の界面に作用する摩擦力と接着力および面圧力と測定せん 断力との関係を確認し、これらの力が樹脂モールド構造全体の挙動に及ぼす影響を検討する.さ らに界面に加わる面圧とせん断力との関係を明らかにする.

本章の構成を以下に示す.

- 緒言
- 樹脂材料の選定と基礎特性
- 要素モデルと実験方法
- 樹脂モールド構造の接着界面はく離実験
- せん断力と面圧との関係
- 結言

3.2 樹脂材料の選定と基礎特性

電力機器のモールドに使用する樹脂材は,通常,充填剤として溶融球状シリカが含まれてい る.このような樹脂材は,モールド時の界面のき裂発生を防止するために,応力緩和材を用い る必要がある.また,充填剤として溶融球状シリカを添加する樹脂材もあるが,両材料とも靭 性付与剤は含まない.それに対して,充填剤として溶融球状シリカに加え,靭性付与剤である アクリル微粒子を添加する樹脂材は,アクリル微粒子入りの材料の中でも比較的にき裂の進展 に対する抵抗指標の1つである破壊靭性値が高くない.また,コスト面で優位性がある樹脂材 の特徴は線膨張係数がエポキシ樹脂材の中でも比較的に大きく,残留応力の増加が考えられる.

このような樹脂材の中から本研究の題材とする樹脂材として,今後の樹脂モールド製品の動 向を考慮しコスト面で優位性がある材料を優先的に選定する.基礎特性測定実験のために樹脂 板を製作し,樹脂の基礎データとして樹脂のヤング率と引張強度および衝撃強度を測定する.樹 脂材の温度依存性に関する基礎データはメーカのカタログ値を用いる.

3.2.1 樹脂材料の選定

本研究に適切な樹脂材料の選定のために表 3.2.1 に示す樹脂材料の特性の比較を行う.Compound D は充填剤として溶融球状シリカが含まれている.この樹脂材は,モールド時の界面の き裂発生を防止するために応力緩和材を用いる必要がある.Compound C も同じく充填剤とし て溶融球状シリカを添加するが,両材料とも靭性付与剤は含まない.それに対して,Compound B と Compound A は充填剤として溶融球状シリカに加え,靭性付与剤であるアクリル微粒子 を添加する.アクリル微含有を含有する Compound B が,比較の中で最も破壊靭性値が高い. Compound E は,コスト面で優位ではあるが線膨張係数が比較の中で最も大きく,残留応力の 増加が考えられる.Compound G,Compound H は,高熱伝導が特徴であるが高粘度である ためモールド性の確認が必要である.Compound H では靭性付与剤としてシリコーン微粒子が 添加されており,比較的に靭性値が高い.応力緩和層無しで樹脂モールド構造に使用可能だが, 低コスト化と低粘度化が課題となる.

これらの比較をレーダチャートにしたのが図 3.1 である.図 3.1 ではモールドにおける重要評価因子をコスト,ガラス転移温度,許容欠陥寸法,歪安全率,応力安全率を同時に同図で比較している.この比較から,総合的に評価が高いのが Compound B であるが,本研究ではコスト面が優位であるが線膨張係数が高く応力として厳しい条件である Compound E を用いて試験片を作成する.
Evaluation criteria	Compound							
	А	В	\mathbf{C}	D	Е	\mathbf{F}	G	Η
$\operatorname{Cost}(\operatorname{Yen}/l)$	1280	1370	1200	1070	900	2700	1000	1000
Glass transition temperature()	138	134	137	140	142	136	130	131
Expansion coefficient(ppm/ $~$, at $\leq T_{\rm g}$)	22	23	21	22	29	18	24	23
Fracture toughness $K_{\rm IC}({\rm MPa}{\cdot}\sqrt{m})$	3.1	3.6	2.2	1.9	1.9	2.5	3.6	2.9
Stress factor of safety (at 25)	7	7	7	7	4	10	6	8
Strain factor of safety (at 25)	7	7	7	7	4	10	6	8
Allowable defect size(at 25)	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
Heat conductivity $(W/m \cdot K)$	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	1.49	0.6

Table 3.1: Resin material characteristic list .



Fig. 3.1: Comparison of resin material characteristic using Radar chart .

3.2.2樹脂材料の基礎特性

選定した材料を用いて,樹脂モールド板を製作し,その樹脂板から図3.2(a)に示す試験片を 作成し樹脂材料の基礎特性測定試験を行った.0.001 m/secの速度での引張試験に使用した静 引張試験機を図 3.2(b) に示す.また, 0.1 m/sec と 1.0 m/sec の速度での引張試験に使用した



Fig. 3.2: Physical-properties measurement examination of epoxy resin .



Fig. 3.3: Relation between tensile stress and strain : Static tension $\operatorname{test}(0.001\ \mathrm{m/sec})$.



Fig. 3.4: Relation between tensile stress and strain :Static tension test(0.01 m/sec).

衝撃試験機を図 3.2(c) に示す.また,図 3.3 は 0.001 m/sec の速度で応力とひずみとの関係 を示す.選定材料の引張破断強度のカタログ値が70 MPa であるのに対して,本試験の破断強 度の結果は図 3.3 に示すように 52 MPa ~ 77 MPa の範囲であり,その平均は約 64 MPa である.



Fig. 3.5: Relation between tensile stress and strain :Impact-test(1.0 m/sec) .

また,図3.3 においてひずみ0.5 % の時の応力が48 MPa であることからヤング率は約9.4 GPa であることがわかる.図3.4 に引張速度0.1 m/sec,図3.5 に引張速度1 m/sec の時の応力とひ ずみの関係を示す.破断強度の引張速度依存に関して,0.001 m/sec から1 m/sec に速度が増 加するのに伴い,破断強度は約40%増加することがわかる.また,ヤング率はほとんど変わ らないことがわかった.

3.3 試験体の概要と実験方法

3.3.1 試験体の概要

接触界面の挙動を確認するための試験体の概要のイメージを図 3.6 に示す.インサート材を 図 3.6 に示す 2 トン試験機のラムによって軸方向に上方から押し出す試験に供する.図 3.6 の 治具の中央にインサート材の直径より大きい穴を設けて,インサート材が内部に落とされるよ うになっている.インサート材を押し出す際のせん断力 f_s を測定する.力の釣り合い関係式 $f_s = \mu P$ (ここで, μ は摩擦係数, P は面圧力で面圧 σ_{pm} × 接触面積 A_0 を示す.)によって,樹 脂とインサート材間界面に加わるモールド時の面圧 σ_{pm} を求めることができる.



Fig. 3.6: Specification of element model .

3.3.2 試験方法

界面強度を求めるための界面はく離実験概略を図 3.7 に,試験片付近の拡大図を図 3.8 に示 す.試験装置は,図 3.7 に示すように冶具上に試験片が設置されている.また,図 3.7 の冶具の 中央には円柱が押し出されるように金属円柱の直径より大きい貫通穴を設けている.試験機の ラムでモールドされている金属円柱を変位制御により 0.01 mm/secの速度で押し出す.押し出 す際のラム負荷すなわちせん断力 *f*_s と変位 *x* を計測する.

試験には島津製作所製オートグラフ AG-100 kNG の試験機を使用した.また,変位測定には 東京測器研究所製高感度変位計 CDP-25 の 25 mm 変位センサーA と CDP-10 の 10 mm 変位 センサーBを使用した.ここで変位 x は,変位センサーA により計測される押しラムの先端の 変位と変位センサーBにより計測される受け治具の変位との差を取って補正した値を用いる.

試験体は,第2章の樹脂モールド内部界面生成プロセスの方で示したようにあらかじめ金属 円柱を挿入した金型中に液状のエポキシ樹脂を注入し真空脱泡を行い,温度上昇による硬化反 応で金属円柱と樹脂が一体となり金型から離型され図3.9のように製作される.

モールドを行う際の炉の設計条件は、一次硬化温度85 で7時間保持し、二次硬化温度130 で24時間保持後、7 /hourで常温(20)まで冷却した。図3.10はモールド時に測定した
 樹脂の中の温度を示す、硬化時の最大温度差は110 で、最高温度は130 である、また、用いたエポキシ樹脂のガラス転移温度は140 であるため、ガラス転移温度付近で生じる樹脂の



Fig. 3.7: Experimental system .

粘性特性による影響は少ないと考えられる.

熱硬化型樹脂モールド構造は,樹脂が硬化するときに起こる体積変化,および樹脂と金属の熱 膨張係数の差異によるひずみに起因する残留応力(σ_{pm})が面圧として図 3.11(a)のように内部 界面に働く.その内部界面の金属と樹脂間の状態をレーザー顕微鏡で観察した写真を図 3.11(b) に示す.このように金属と樹脂間の界面は金属表面の切削痕による周期的凸凹に樹脂が流れ込 み硬化した状態となっていることがわかる.つまり,押し出し実験は周期的凸凹の界面状態の 中でせん断方向の負荷によってはく離を起こすことになる.



Fig. 3.8: Enlarged view of experimental system.



Fig. 3.9: Test piece .



Fig. 3.10: Relationship between temperature and time .



(a) Stress field of test piece

(b) Observation interface by microscope

Fig. 3.11: Axially symmetrical cross section .

3.4 樹脂モールド構造の接着界面はく離実験

試験機のラムでモールドされている金属円柱を変位制御により 0.01 mm/sec の速度で押し出 す際のラム負荷すなわちせん断力 *f_s* と変位 *x* を計測する.

図 3.12(a) は試験中の金属円柱(アルミニウム)の押し出し状態を,図 3.12(b) は試験片のア ルミニウムが試験途中で押し出されている状態を示す.図 3.12(a) と図 3.12(b) に示すように, 押し出した後の樹脂内周にアルミニウムの残骸は残っていない.または押し出された後のアル ミニウムの外周に樹脂の残骸は付着していない.つまり,樹脂と金属間の接着界面で,はく離 が起こっていることを示す.

図 3.13 には三種の試験片でのせん断力 f_s と変位 x の関係を示す.変位はラムの先端部の位置を示し樹脂の高さ 27 mm まで変位制御により変化させている.図 3.13 の変位軸は 0.0 mm から 0.2 mm までの急激なせん断力の変化とそれ以降の滑らかなせん断力の変化を同時に表すために対数で表している.

図 3.13 よりせん断力は材料によらず,急激に増大し,急激に減少するピーク(変化の山)が 過渡の中で2箇所存在する.これは,本構造が平面構造ではなく,軸対称構造であるためと考 えられる.つまり,はく離が生じると接着力(結合力)が開放され,均等に加わっていた面圧 の再配分が生じる可能性がある.これによって部分的な力の集中が起き,安定する間にピーク が現れると考えられる.このことから一つ目のピークがはく離の有無を表すと考えられる.

図 3.13 に示す界面のはく離強度に相当するせん断力は銅(33 kN), 鉄鋼(33 kN), アルミニウム(8 kN)の順に大きい.図 3.13 に示す試験結果を材料間で比較すると, いずれの材料も, せん断力は急激に増大し, 最大せん断力の後, 金属円柱と樹脂間に接触界面が現われせん断力







(b) Test piece for halfway test

Fig. 3.12: Test piece for halfway test .



Fig. 3.13: Relationship between shear forces and displacement .

は急激に減少していることがわかる.図3.13の試験結果は以下のように整理される.

- 樹脂モールド構造の界面のせん断強度の限界までは摩擦力と接着力の両方が作用すると
 考えられる.
- 金属円柱が樹脂界面をすべりだすと接着力はなくなり、摩擦力だけが作用すると考えられる.
- 対象材質の比較からせん断強度の限界までの最大せん断力は銅と鉄鋼が大きく、その値は
 図 3.13 より 33 kN であり、アルミニウムは 8 kN である.
- 対象材質の比較からはく離直後のせん断力(摩擦力)は鉄鋼が最も大きく,その値は図
 3.13 より 13 kN であり,銅は 11 kN,アルミニウムは 6 kN である.
- はく離直前の最大せん断力に含まれる接着力は、摩擦力を取り除いた値となり銅が最も 大きく、その値は 22 kN であり、鉄鋼は 20 kN、アルミニウムは 2kN である.

3.5 せん断力と面圧との関係

測定したせん断力には界面状態や面圧の影響が含まれている.これより,界面の接着強度を 評価するためには,界面状態の影響が少なく,面圧の影響が大きいと思われるモールド試験体 を製作して, せん断力と面圧との関係を把握する必要がある.

セラミックスを絶縁体として使用する場合,汚れなどをつきにくくするためにセラミックス の表面に釉薬処理を施す場合が多い.図3.14(a)は釉薬処理のみを施した構造を押し出した後 のセラミックスの表面状態の写真と変位とせん断力との関係を示す.また,図3.14(b)は釉薬処 理施した後,釉薬側と樹脂側両方に接着性があるカップリング材で界面処理を行った構造を押 し出した後のセラミックスの表面状態と変位とせん断力との関係を示す.これにより接着の程 度にかかわる界面状態の以外の材料,寸法,樹脂厚(14 mm)などの条件を同様に設定するこ とで,残留応力による面圧力((a)14 kN,(b)14 kN)が一定の場合の接着強度の変動((a)接着 力なし,(b)接着力あり)をせん断力の変動((a)17 kN,(b) 30kN)によって確認できる.

次に,接着作用があるカップリング材処理を行った試験体を用いて,樹脂厚を20mmと30



Fig. 3.14: Relationship between shear forces and displacement .



Fig. 3.15: Relationship between maximum shear forces and pressure forces.

mm に変えることで残留応力による面圧を変動させて比較する.図3.14(c)は樹脂厚を20 mm にした構造を押し出し後,セラミックスの写真と変位とせん断力((c)32kN)との関係を示す. 図3.14(d)は樹脂厚を30 mmにした構造を押し出し後のラミックスの写真と変位とせん断力 ((d)36.6 kN)との関係を示す.

ここで、図 3.15 に図 3.14(b)、(c)、(d)のせん断力と面圧力の関係を示す、図 3.15 に示すよう
 に接着力による最大せん断力((b)30 kN、(c)32 kN、(d)36.6 kN)と残留応力による面圧と摩
 擦係数による摩擦力((b)14 kN、(c)15 kN、(d)17 kN)は比例の関係であることが読み取れる、

3.6 結言

2章のモールドプロセスにしたがって,銅,鉄鋼,アルミニウムの3種類の金属インサート 材をモールド製作した試験体を用いて,試験体要素モデルと内部接着界面のはく離実験方法を 示した.

内部接着界面のはく離実験を行い金属と樹脂間の接着界面に生じるせん断力を測定した.また,測定したせん断力から樹脂モールド構造の金属と樹脂間の界面には,摩擦力と接着力および面圧が作用していることを確認した.さらにモールド時の残留応力によって接着界面に面圧が働くことになるが,この面圧とせん断力との関係が比例の関係であることを明らかにした.

内部接着界面のはく離実験結果により,界面のはく離強度に相当するせん断力は銅(33 kN),

鉄鋼(33 kN), アルミニウム(8 kN)の順に大きいことと, いずれの材料も, せん断力は急激 に増大し,最大せん断力の発生後,金属円柱と樹脂間に接触界面が現われ, せん断力は急激に 減少していることがわかった.また,樹脂モールド構造の界面のせん断強度の限界までは,摩 擦力と接着力の両方が作用すると考えられ,金属円柱が樹脂界面をすべりだすと接着力はなく なり,摩擦力だけが作用すると考えられる.さらに,対象材質の比較からせん断強度の限界ま での最大せん断力は銅と鉄鋼が大きく,33 kN であり,アルミニウムは8 kN である.はく離直 後のせん断力(摩擦力)は鉄鋼が最も大きく13 kN であり,銅は11 kN,アルミニウムは6 kN である.はく離直前の最大せん断力に含まれる接着力は,摩擦力を取り除いた値となり銅が最 も大きく,22 kN であり,鉄鋼は20 kN,アルミニウムは2 kN である.

第4章 接着・摩擦有限要素解析手法の提案

4.1 緒言

第3章では,樹脂モールド構造の金属と樹脂間の接着界面強度と界面に働く力をはく離実験 により求め,樹脂モールド構造の内部界面の挙動を検討した.その結果,内部界面には,摩擦 力と接着力および面圧が作用し,これらの力が樹脂モールド構造全体の挙動に与える影響が大 きいと考えられる.樹脂モールド構造の設計には内部界面の接着強度を正しく評価するために, 摩擦力と接着力および面圧をすべて考慮した解析手法が必要である.

しかしながら,樹脂モールド構造における界面の力学特性についてはまだ不明な点が多く, 多くの場合は,異種材料間を共有節点にする界面を考慮しない固着モデルを用いるか,または, 摩擦力のみを考慮し解析を行う.

摩擦力を考慮した界面の接触問題を解析する方法としては,ペナルティ法 [65] や拡張ラグラ ンジェ方法 [66,67] が広く用いられている.しかし,樹脂モールド構造のような界面に摩擦力 と接着力および面圧が複合して存在する問題には適用できない.このような問題に対して,損 傷力学に基づき,界面の損傷とはく離を統合させた Cohesive zone model に関する研究が数多 く行われている [71–74,92,93]. Cohesive zone model によるき裂進展解析はき裂が接触する二 つの界面が分離する現象を理想化させ,二つの界面に作用する結合力と変位間の構成方程式を記 述することにより,き裂の発生および進展を解析する方法である.しかしながら, Cohesive zone model はモデルの複雑さにより製品向けの汎用的なモデルには至っていない.

そこで本章では,実験により求めた金属製の円柱と樹脂間のせん断力を用いて,接着強度指標による三つの力(摩擦力,接着力,残留応力による面圧)の分解と界面に作用する力のモデル化を行う.また,分解した3つの力を非線形ばねを使った単純モデルでモデル化し,そのモデルを用いて接着・摩擦有限要素解析手法を提案し,提案手法の妥当性を検討する.さらに,界面の特性を再現できることを示す.また,樹脂モールド構造の内部界面の接線方向はせん断ばね(接着強度指標を用いるせん断力によるばね定数)とし,法線方向は垂直ばね(樹脂のヤング率から求まるペナルティ剛性によるばね定数)とするモデル化を行うことで,実機部品である絶縁ロッドの破断強度試験がよくシミュレートできることを示す.[94].

本章の構成を以下に示す.

緒言

- 界面に作用する力のモデル化
- 有限要素法に基づく接触解析手法
- 接着係数および接着強度指標の妥当性検証
- 気中絶縁ロッドの開発への適用

結言

4.2 界面に作用する力のモデル化

実験結果に基づき,樹脂モールド構造に適した解析手法を提案するために,界面に作用する 力のモデル化を行う.

図 3.9 に示す試験片を軸対称モデルとして図 4.1 に示す.図 4.1(a) は試験開始前で界面が結 合され金属円柱と樹脂が一体となっている状態を示し,図 4.1(b) は試験が開始され強制的に変 位が与えられるが,まだ界面は結合された状態で金属円柱と樹脂は一体的な弾性変形 x_e が生じ た場合の状態を示す.その後,最大せん断力に達し,結合からはく離状態になる.最大せん断 力は f_{smax} と表記する.

界面に生じるせん断ひずみとせん断負荷が加わる界面の面積,およびせん断力と変位との関係 を図 4.2 に概念的に示す.図 4.2(a) に示すように界面のはく離強度時の変位 x_e までは樹脂と金属 は一体となっていて,ラムの負荷による上部平面のずり変形によってせん断ひずみ $\gamma_S(=x_e/(R_2 - R_1))$ が生じる.また,せん断負荷が加わる界面の面積は図 4.2(b) で示すように, x_e までは 初期断面積 A_0 を維持していて,それ以降のせん断面積 A(x) は変位 x の変動とともに減少して いく.

せん断力 f_s のモデル化を図 4.2(c) に示す.ラムの負荷による変形量が界面のせん断強度の限度内である場合,せん断力 f_s はせん断応力 τ_s とせん断面積 A_0 の積で求まる.ここで,せん断応力 τ_s は横弾性率 Gとせん断ひずみ $\gamma_S(x)$ の積で得られる.従って,弾性変形量 x_e までのせん断力 f_s は,変位 xに比例して増加する.

変位は $x = x_e$ の時点で,界面のせん断力 f_s は最大となり,その後せん断力 f_s は急激に減少し,せん断面積の減少と同様にせん断力 f_s が減少していく.ここで,せん断力 f_s が急激に減少

する理由として,金属と樹脂が一体となって弾性変形し,そのせん断応力がせん断強度に達した時,接触界面が現われ界面をすべり出すことによるもの考える.

滑っている時は,金属が樹脂界面を等速直線運動していると仮定すると,せん断力は一定の 摩擦力とつりあうことになり,せん断面積の減少とともに減少していくことになる.つまり,せ ん断強度の限界に達した後のせん断力はクーロン摩擦力によるものと考えられる.

そこで,金属と樹脂が一体となって弾性変形し,そのせん断応力が界面のせん断強度の限界 となる力を最大せん断力 f_{smax} とし,図 4.2(c) で示すように摩擦力 f_{f} に接着力 f_{b} が加わり,最 大せん断力 f_{smax} と釣り合っていると想定する.また,摩擦力 f_{f} と接着力 f_{b} ともに,モールド 時の残留応力による面圧に依存するものとする.

4.3 有限要素法に基づく接触解析手法

接触界面に作用する力のモデル化を基に,これらの力の定式化を行う.はじめに,焼き嵌め 理論に基づく面圧を示し,次に摩擦力と接着力のそれぞれの定式化を行う.また,界面の接着 特性を再現できる接触解析手法に適用する.



(a) Before test

(b) Under test

Fig. 4.1: Concept of test piece (Axially symmetrical cross section).



(a) Relationship between shear strain and displacement



(b) Relationship between shear area and displacement



(c) Relationship between shear force and displacement

Fig. 4.2: Modeling of contact interface .

4.3.1 残留応力による面圧作用

第2章の試験体モールド製作時の熱変形量の測定によって,モールド時の熱変形は1次硬 化反応が生じる85 で圧縮方向にひずみが発生し,その後130 への温度増加にしたがって熱 膨張によりひずみが引張に転じ130 で2次硬化反応が生じると再びひずみは圧縮方向に発生 し,130 一定で24時間放置すると応力緩和によるクリープひずみが発生する.さらにその後 7 /hの徐冷で常温に戻す際,圧縮方向に熱ひずみが発生することがわかった.これは,1次 硬化および2次硬化での硬化反応によるひずみは,クリープひずみの発生によりリセットされ, 残留応力として残るひずみは,主に徐冷で常温に戻す際に発生する熱ひずみであることを表す.

そこで,測定した円周および軸方向ひずみと FEM の熱応力計算によりひずみがほぼ一致していることと,FEM による半径方向の平均面圧と焼き嵌め理論による面圧がほぼ一致していることを確認し,本研究における残留応力による面圧 σ_{pm} 作用はモデル化の簡略化のために,組み合わせ円柱の焼き嵌め理論による,式 (4.1) により算出することとした.ここで, R_1 , R_2 は図 4.1(a) に示す金属円柱の半径と樹脂モールド試験片の外径である. $E_1 \ge E_2$ は金属と樹脂の ヤング率, $\nu_1 \ge \nu_2$ は金属と樹脂のポアソン比である.また, δ は焼きはめ代で,金属と樹脂の線膨張係数の差と温度差 T および金属円柱の半径の積として求められる.

$$\sigma_{\rm pm} = \frac{\delta}{2R_1 \frac{(1+\nu_2)(\frac{R_2}{R_1})^2 + (1-\nu_2)}{E_2(\frac{R_2}{R_1})^2 - E_2}} + \frac{(1-\nu_1)}{E_1}$$
(4.1)

4.3.2 接触界面の摩擦力の作用

摩擦力は, Coulomb 摩擦モデルを用いて, 次式で表される.

$$f_{\rm f} = \mu < -f_{\rm n} > = \begin{cases} \mu f_{\rm n} & (f_{\rm n} < 0) \\ 0 & (f_{\rm n} > 0) \end{cases}$$
(4.2)

ここで, $f_{\rm f}$ は摩擦力の接線方向成分, $f_{\rm n}$ は樹脂と金属円筒の面圧の法線方向成分を示す.また, すべりに伴い変動する金属と樹脂間の界面にせん断力が加わるせん断面積A(x)は,以下で表 される.

$$A(x) = \begin{cases} 2\pi R_1 H & (0 \le x \le x_e) \\ 2\pi R_1 (H - (x - x_e)) & (x > x_e) \end{cases}$$
(4.3)

ここで, H は図 4.1 で示す樹脂の高さである.式 (4.2) を用いて面圧の法線方向成分 f_n は式 (4.4) より求められ, 摩擦力 f_f は式 (4.5) で表される.

$$f_{\rm n}(x) = \sigma_{\rm pm} \mathcal{A}(x) \quad (x \ge x_{\rm e}) \tag{4.4}$$

$$f_{\rm f}(x) = \mu \sigma_{\rm pm} \mathcal{A}(x) \quad (x \ge x_{\rm e}) \tag{4.5}$$

4.3.3 接着界面の接着力の作用

樹脂モールド構造の界面にはモールド時に生じる残留応力による面圧が垂直に作用し,垂直 抗力が生じる.従って,接触界面に生じる接着力は,残留応力による面圧に比例して,次式の ように表される.

$$f_{\rm b} = B < -f_{\rm b} >= \begin{cases} Bf_{\rm b} & (f_{\rm b} < 0) \\ 0 & (f_{\rm b} > 0) \end{cases}$$
(4.6)

ここで, f_b は接着力の接線方向成分, f_b は接着時の面圧(垂直抗力)で,Bは"接着係数", $\mu + B$ は"接着強度指標"として新しく定義するものであり,面圧と接着面積の大きさに依存 しない接触する材料間の接着強度に対応するものである.接着力 f_b が式(4.6)のように面圧に 比例することは,別途面圧を変化させた試験により確認している.これは,垂直方向の残留応 力の接着プロセスへの影響と残留応力の垂直方向とせん断方向の混合モード効果による見かけ の界面のせん断強度の向上が原因と考えられる.また,接着力 f_b は樹脂と金属の間に接触界面 の発生により変位が生じると,失われる.従って,図4.2(c)で示すように最大せん断力が生じ 弾性変形量 x_e に達した時に接着力 f_b は零となり式(4.7)のようなステップ関数で定義する.

$$f_{\rm b} = \begin{cases} B\sigma_{\rm pm} \mathcal{A}(x) & (x \le x_{\rm e}) \\ 0 & (x > x_{\rm e}) \end{cases}$$
(4.7)

4.3.4 有限要素法に基づく接触解析手法

前節まで定義した界面のモデルおよび定式を用いて,界面の接着特性を精度良く再現できる 接触解析手法を以下で検討する.有限要素法によるモデルは,図4.3に示すように接触する金 属と樹脂の節点間に接触ペアーになる2節点を設け,それらを結ぶ非線形ばねを設定する.



Fig. 4.3: Analysis model (Non-linear spring).



Fig. 4.4: Flowchart of contact analysis .

ばねの接線方向(接触面の接線方向)と法線方向(接触面の垂直方向)はそれぞれ独立と考え,図4.3に示すように接線方向はせん断ばねとし,法線方向は垂直ばねとすることで界面の 接着特性の再現を試みた.式(4.5)と式(4.7)によるせん断力 f_sは下記のように表される.

$$f_{\rm s} = \begin{cases} (\mu + B)\sigma_{\rm pm}2\pi R_1 H x = \frac{f_{\rm smax}}{x_{\rm e}} x & (x \le x_{\rm e}) \\ \mu \sigma_{\rm pm}2\pi R_1 (H - (x - x_{\rm e})) & (x > x_{\rm e}) \end{cases}$$
(4.8)

有限要素解析では等間隔にメッシュを配置し,系全体で式(4.8)が成立するように各節点のば ね定数を設定する(総計が式(4.8)になるように平均的に振り分ける).また,垂直ばねは樹脂 のヤング率から求まるペナルティ剛性を用いる.解析の流れを図4.4に示す.

4.4 接着係数および接着強度指標の妥当性検証

本章では,接着力と接着係数およびそれを取り入れた有限要素法に基づく接触解析の有効性 を検討するために,第2章の実験結果と解析結果の比較を行う.

4.4.1 接着係数および接着強度指標の定義

変位 $x = x_e$ ときの最大せん断力は,式 (4.8) より,次の式ように表すことができる.

$$f_{\rm smax} = (\mu + B)\sigma_{\rm pm} A(x_{\rm e}) \tag{4.9}$$

式 (4.1) と式 (4.3) より σ_{pm} , と A(x_e)を求め,最大せん断力 f_{smax} を測定結果の図 3.13 より読み取り,式 (4.9) に代入すれば,摩擦係数と接着係数の和で定義する接着強度指標 (μ + B)を得ることができる.また,摩擦係数は測定(平均値)により求められる,接着係数Bを算出することができる.表 4.1 に算出した接着係数と摩擦係数を共に示す.接着係数は,銅,鉄鋼,アルミニウムの順に大きい.

4.4.2 せん断力の実験値と解析値の比較

有限要素法に基づく接触解析により, せん断力 f_sを求め,図 3.13の測定結果と比較を行う. 解析に用いた材料定数を表 4.2 に示す. 解析モデルは,図4.1(a) に示す R₁は18.5 mm, R₂は38.5 mm, H は27 mm にした図4.5 の 軸対称モデルを用いる.図4.5 に示すように,樹脂側と金属側で同じ位置節点ペアを持てるよ うにメッシュを作成する.

実験で用いた試験体の硬化時の最大温度差は110 で,最高温度は130 であることから熱 負荷 T = 110Kとなる.また,用いたエポキシ樹脂のガラス転移温度は140 であるので, ガラス転移温度付近で生じる樹脂の粘性特性による影響は少ないと考えられる.そこで樹脂の 温度依存性を考慮するために,表4.1 に示すように25 と130 での樹脂の物性値を用いて, 試験体全体に熱負荷(130 25)を加える FEM による熱応力解析(銅と樹脂の界面は摩 擦係数 0.38 による接触条件)を行い,求めた残留応力による面圧と表4.1 に示すように130 での樹脂の物性値を用いて,4.3.1 節の焼き嵌め理論式(4.1) による計算を行い,求めた面圧を 比較する.図 4.6 に樹脂の温度依存性を考慮した FEM の計算結果を示す.図 4.6 に示すように 界面に働く面圧の平均は19.2 MPa である.それに対して4.3.1 節の焼き嵌め理論式(4.1) によ る計算結果も18.8 MPa と FEM による結果とほぼ一致していることが確認できる.そこで,単 純モデル化による接着・接触解析手法では4.3.1 節の焼き嵌め理論に基づく面圧を用いる.また, 金属円筒の上部の節点を Tying で設定し,図 4.5 の中の点 A に強制変位を与えることで図 3.7

Table 4.1: Coefficients of friction and adhesion .

Coefficients		Cu(C1011)	Fe(SS400)	Al(1050)
Friction coefficient	μ	0.17	0.16	0.13
Adhesion coefficient	B	0.38	0.28	0.05

Table 4.2: Physical properties .

Properties	Unit	Resin	Al(A1050)	Cu(C1011)	Fe(SS400)
Young's modulus E	GPa	$11/15^{*}$	70	117	206
Poisson's ratio ν	-	$0.29/0.34^{*}$	0.35	0.34	0.3
Thermal expansion coefficien α	ppm/K	$29/52^{*}$	23	17	14
	$* {\rm ~at} {\rm ~} 25$	/130			

の押し出し試験を再現する.図 4.7 の解析プロセスで示すように,実験で得られた最大せん断 カ f_{smax} =33 kN とはく離直前の変形量 $x_e = 0.2 \text{ mm}$ を用いて,せん断ばんね定数を決める.図 4.5 で作成した界面の非線形ばねペアはn=29ペアあるので, $f_{smax}/28=1178.5$ N を界面内部の 27 ペアのせん断ばね定数として設定し, $f_{smax}/2(n-1)=589.3$ N を界面端部の2ペアのせん断 ばね定数として設定する.すべり時の挙動は式(4.1)による面圧を用いて算出し,金属と樹脂の 間の摩擦係数 $\mu=0.17$ と面圧および接触面積変化を考慮して,ばね定数を設定した.4.4.1 に示 す.Cu 場合についてせん断力と変位との関係を図 3.13 の実測値と一緒に図 4.8 に示す.これよ り同時にすべり変位ごとの内部せん断力の分布を表している.材質ごとに,せん断力の変動と 変位との関係を図 4.9 から図 4.11 に示す.解析値は実験から得られた係数を用いるため,いず れの材質においても,解析値と実験値の傾向が同様であることがわかる.



Fig. 4.5: Axially symmetrical cross section FEM-model.



Fig. 4.6: Radial stress distribution by FEM .

(Using temperature-dependent properties of resin).



Fig. 4.7: Process of contact analysis (Case of C1011).



Fig. 4.8: Comparison between measured and numerical-analysis results (Case of C1011) .



Fig. 4.9: Comparison between measured and numerical-analysis results (Case of A1050).



Fig. 4.10: Comparison between measured and numerical-analysis results (Case of SS400) .



Fig. 4.11: Comparison between measured and numerical-analysis results (Case of C1011).

4.5 気中絶縁ロッドの開発への適用

樹脂モールド構造の内部界面の接線方向はせん断ばね(接着強度指標を用いるせん断力によ るばね定数)とし,法線方向は垂直ばね(樹脂のヤング率から求まるペナルティ剛性によるばね 定数)とするモデル化を行うことで,実機部品である絶縁ロッドの破断強度試験をシミュレー ションできることを示す.なお,絶縁ロッドは2本の鉄鋼棒の間に隙間があけられており,樹 脂でモールドされ,接地作用ができる構造になっている.

4.5.1 有限要素モデル

図 4.12 に,絶縁ロッドの解析に用いる軸対称有限要素モデルを示す.接触する界面のモール ドと鉄鋼棒上の要素分割数が同じ数になるようにモデルを作成し,接触節点ペアーを作成する. 表 4.1 の鉄鋼 (SS400)の接着係数 0.27,摩擦係数は 0.16 を用いる.

図 4.3 に示すように,接線方向はせん断ばねとし,法線方向は垂直ばねとすることで界面の 接着特性を再現する.表4.2の鉄鋼(SS400)の材料定数を解析に用い,接着・接触有限要素解 析を実施した.



Fig. 4.12: Axial symmetry model of air-insulated Rod.

4.5.2 絶縁ロッドの強度解析

樹脂モールド構造の内部界面の接線方向はせん断ばね(接着強度指標を用いるせん断力によ るばね定数)とし,法線方向は垂直ばね(樹脂のヤング率から求まるペナルティ剛性によるば ね定数)とするモデル化を行うことで,実機部品である絶縁ロッドの破断強度試験がよくシミュ レートできることを示すために,界面の接着特性,金属と樹脂の界面に作用する力として接着 力を考慮する場合と考慮しない場合について,絶縁ロッドを用いて強度評価を行った.本実機 モデルは,絶縁の理由によって鉄鋼棒間に樹脂が挟まれている構造で,樹脂界面にはせん断方 向および引張方向の両方に力が発生する例題であり,また,構造の特徴上樹脂界面の法線方向 の断面積が鉄鋼棒の円周を囲む接線方向断面積より小さく,界面のせん断強度より界面の引張 強度が低いケースである.図4.13に引張力と最大引張応力との関係を示す.接着・接触力を考 慮している本手法の結果では,鉄鋼材側面と接触している樹脂界面での剥離が生じる前に樹脂 の最大引張応力が鉄鋼材底面と接触している樹脂界面で樹脂の引張強さ(43 MPa)に達し,樹 脂破壊が生じる.結果,63 kN が臨界の引張力となる.したがって,本手法によって界面の接 着特性をせん断方向および引張方向共に示すことが可能であると考えられます.

一方,摩擦力のみを考慮する接触解析結果は鉄鋼棒の凸部と樹脂界面に生じる引張応力が15 kNの時,樹脂の引張強さに到達する.



Fig. 4.13: Relationship between shear strain and displacement .

この絶縁ロッドの使用負荷は16kNであるため,摩擦力のみを考慮するこれまでの手法では, 限界値を超える評価となってしまう.そのため,強度信頼性を確保するためには,大型化や高コ ストの原因となる可能性ある.それに対して,接着力も考慮する本手法では,最大応力が安全 率3で決まる設計許容値を下回り,小型化および低コスト化の余地がある,という結果となる.

4.5.3 絶縁ロッドの強度試験

絶縁ロッドの引張試験を実施して,6.2節で示した解析結果と比較を行った.

引張試験は絶縁ロッドを3個用意し,変位制御により0.01 mm/secの速度で鉄鋼棒を引っ張ることで行った結果,3個の破断荷重は,64 kN,68 kN,70 kN,であった.図4.13 に樹脂の最大引張応力が鉄鋼材底面と接触している樹脂界面で樹脂の引張強さ(43 MPa)に達し,界面付近で樹脂破壊が生じた後,さらに変位を増加させ鉄鋼材底面と樹脂間を完全分離させた後の写真を示す.実験では64 kN,68 kN,70 kNが臨界の引張力となる.



Fig. 4.14: Breaking force 68kN.

4.6 結言

樹脂モールド構造の金属と樹脂間の接着界面強度と界面に働く力をはく離実験により求めて, 界面の挙動を検討した.その結果,界面には,摩擦力と接着力および面圧が作用し,これらの 力が樹脂モールド構造全体の挙動に与える影響が大きいと考えられ,そのために,樹脂モール ド構造の接触界面における摩擦力と接着力および面圧が構造全体の挙動に及ぼす影響を考慮し, 接触界面のモデル化および定式化を行った.また,これらを用いて有限要素法に基づく接着・ 接触解析手法を提案し,以下の結論を得た.

- (1) 界面にはく離が生じる直前までに作用する摩擦力以外の力を"接着力"と定義し、それを 規定する"接着係数","接着強度指標"を新しく導入することで、残留応力による面圧に 依存する摩擦力と接着力で構成される接触界面をモデル化および定式化を行った.また、 この接着強度指標が、接触する材料間の接着強度に対応することを示した。
- (2) 接着・接触力を考慮している本手法を絶縁ロッド製品の強度評価に適用した.絶縁ロッド 製品モデルの特徴により,鉄鋼材側面と接触している樹脂界面での剥離が生じる前に樹脂 の最大引張応力が鉄鋼材底面と接触している樹脂界面で樹脂の引張強さ(43 MPa)に達 し,樹脂破壊が生じ,結果,63 kNが臨界の引張力となることがわかった.実験では64 kN,68 kN,70 kNが臨界の引張力となる.したがって,樹脂モールド構造の内部界面の 接線方向はせん断ばね(接着強度指標を用いるせん断力によるばね定数)とし,法線方向 は垂直ばね(樹脂のヤング率から求まるペナルティ剛性によるばね定数)とするモデル化 を行うことで,実機部品である絶縁ロッドの破断強度試験がよくシミュレートできること を示した.

第5章 原子レベルモデリングによる界面接着強 度の検証

5.1 緒言

前章まで,金属円柱と樹脂の界面の挙動を検討するため,樹脂モールドの試験体を作成し,界 面のせん断力の測定を行った.また,測定した結果を基に界面の接着性に着目した接着係数*B* と摩擦係数 µ による接着強度指標(µ+B)を新たに提案し,樹脂モールド構造の接触界面に おける摩擦力と接着力および面圧が構造全体の挙動に及ぼす影響を考慮した接触界面のモデル 化および定式化を行った.さらに,これらを用いて有限要素法に基づく接触解析手法を提案し, はく離の発生からはく離の進展までの界面の特性が再現できることを確認した[94].

はく離の発生からはく離の進展までの界面特性を再現するためにははく離実験が必要となる. つまり,樹脂と金属間の材料が変更するたびに実験を実施しなければならない.また,樹脂モー ルド構造の内部接着界面のメカニズムに基づいて,実験結果から求めた内部界面における材料 毎の接着強度指標の妥当性の検証が必要である.

そこで,本章では界面接着強度を表すひとつの指標として,界面結合の解離を扱う原子レベ ルモデリングにより求められる「界面破壊エネルギー(Interfacial fracture energy)」を定義 し,それを用いて計算による界面接着強度の手法および界面強度の発現機構を検討する.また, 第3章で行ったミクロレベルのはく離実験により得られた界面の接着強度指標とナノレベルの 分子動力学法の計算により得られた界面破壊エネルギーとの定性的な比較を行う.さらに,内 部接着界面のメカニズムを把握することで界面の接着強度の支配因子を検証するために,ナノ スケールの化学結合とミクロスケールのはく離強度の関わり合いについて,主に表面粗さの影 響 [82-89] に着目しながら考察する.

本章の構成を以下に示す.

緒言

• 古典分子動力学手法

- ニュートン力学的分子動力学法による接着強度の評価
- 実験と計算の比較に関する考察

結言

5.2 古典分子動力学手法

古典分子動力学手法について一般的概論の関連図書が多数出版だれているので,それらを参考されたい [95-99].計算科学シミュレーションによる現象予測は有用となるが,原子スケールの分解能で現象をシミュレートするためには,原子1個1個の運動を扱う必要があり,原子の運動方程式を直接解く必要がある.

原子は,原子核とそれを取り巻く電子からできているため,シミュレーションでは,原子核と 電子の状態を解くことになる.原子核は,古典力学の基礎方程式であるニュートンの運動方程式 (質量×加速度=力)に従うが,電子の質量は原子核の数千分の1以下と軽いために,ニュート ンの運動方程式に従わず,量子力学という根本原理に従うことが20世紀初頭に見いだされた. 実は,原子核や目に見える世の中の物体のように,古典力学に従う物質も,電子と同じように 量子力学の基礎方程式,すなわちシュレーディンガー方程式に従っている.ただし,電子の数 千倍以上も質量が重い場合に成り立つ近似を持ち込むと,シュレーディンガー方程式がニュー トンの運動方程式で近似できるため,古典力学で運動状態を十分に表現できてしまうのである. シュレーディンガー方程式は,電子のような粒子を波として記述するため,波の状態を表すΨ (r,t)の方程式として次のように表される.

$$\frac{-\hbar^2}{2m}\frac{\partial^2\Psi}{\partial r^2} + U\Psi = i\hbar\frac{\partial\Psi}{\partial t}$$
(5.1)

ここで, m は質量, r は空間座標, t は時間, U はポテンシャルエネルギー, i は虚数単位である.また, \hbar はプランク定数と呼ばれ, \hbar = 1.05457 × 10⁻³⁴J ·s である.質量 m が電子の数千倍となる粒子の波は, 波の存在領域が狭い領域に限られた波束という形で表され, 波束の運動がニュートンの運動方程式で近似的に表されることが証明できる.このため, 原子核や目に見える世の中の物体は, ニュートンの運動方程式で記述できるのである.量子力学が根本原理であることがわかった現在でも, 古典力学のニュートンの運動方程式は物体の運動を記述する重要な方程式ということになる.ここでは, 量子力学から古典力学までのシミュレーションを用いて, 電子物性と力学的物性に大別される材料物性を高精度予測するシミュレーション技術について述べる.

5.2.1 材料の力学特性の古典力学シミュレーション [76]

材料の力学的物性の中でも,産業上で最もニーズが多く,感覚的にも理解しやすい密着強度 (はく離強度)を例として取り上げて,古典力学に基づく原子シミュレーション手法を解説す る [100].材料としては,最近の地球環境保全の潮流から,省エネルギー化のための軽量化を意 図して多用されつつある樹脂材料を取り上げることにする.樹脂材料は,うまく材料を選ばな いと金属材料との密着強度が低い場合が多く,電子部品の製造工程などにおいてはく離してし まうため,密着強度を予測し,強度の高い材料を選定することが重要となる.

古典力学シミュレーションにより,樹脂材料と金属材料の界面における密着強度を予測する 場合,それぞれの材料中に存在するすべての原子についてのニュートン運動方程式を連立方程 式として解くことになる.これは到底人間の力では解くことができないため,計算機に解かせ ることになる.方程式は,質量×加速度=力であるが,これを記述すると以下の式となる.

$$m_j \frac{\partial^2 r_j}{\partial t^2} = -\frac{\partial U}{\partial r_j} + F_j^{ext}$$
(5.2)

ここで, j は原子に付けた通し番号, m_j は原子 j の質量, r_j は原子 j の空間座標, t は時間, U はポテンシャルエネルギー, F_j^{ext} は原子 j に働く外力である.式 (5.2) は原子の数だけ存在 するため連立方程式となる.

式 (5.2) において, $-\partial U/\partial r_j$ は材料中の原子の間に働く内力であり,原子の間に存在するばね 力のようなもので記述できる.この原子間力をデータベースとして用意しておいてから式(5.2) を解き,シミュレーションを実行することになる.したがって,簡単には,質量を持った点(質 点)がばねで結ばれている系に外力が働く場合の各質点の運動を求めるのが,このシミュレー ションの本質と言える.

原子間力を示すばね力は,原子間がある程度の距離(約0.5 nm 程度)だけ離れてしまうと, 力をほとんど及ぼさなくなり,いわばばねが切れた状態となる.金属下地の上に接合されてい る樹脂の各原子に外力を与えて引きはがすピール試験をシミュレートした結果を図5.1 に示す. はがれてしまっている部分があるが,それらの部分の原子間力は,ほとんどゼロとなっており, ばねが切れたような状態となっている.外部からどれくらいのエネルギーを与えたらはがれる かといった情報から,密着強度を予測することができる.



Fig. 5.1: Prediction of the adhesive strength of resin [76].

5.3 ニュートン力学的分子動力学法による接着強度の評価

試験における界面のはく離とすべりの変形は図 5.2(a) に示すモード I および図 5.2(b) に示す モード II と二つの独立な変形様式に分離することができる.つまり,接着力によって一体化さ れていた界面が,せん断方向に荷重を受けはく離が生じ界面が現れ接着力がゼロとなる図 5.2(a) に示すようにモード I の状態となり.界面が現れた後は図 5.2(b) に示すようにモード II の状態 でのすべりが発生するが,分子間のすべり難度ははく離が生じにくい尺度を表し接着強度に関 係すると考えられる.

そこで,分子動力学法により樹脂モールド構造における内部界面の接着強度を予測する手法 を検討する [100,101].

5.3.1 分子動力学手法によるはく離モードIの接着強度評価

計算における接着強度評価を検討するために,界面接着強度を表すひとつの指標として,界 面破壊エネルギー (Interfacial fracture energy)を定義する.破壊モード I の場合の界面破壊エ ネルギー (Interfacial fracture energy for mode-I) とは,金属下地上に樹脂が接着した状態での



Fig. 5.2: Concept of interface fracture .

ポテンシャルエネルギーと剥離した状態のポテンシャルエネルギーとの差で定義する.図5.2(a) に示すモードIのように金属下地上に樹脂が接着した状態とはく離した状態を表す分子構造を 図5.3に示す.図5.3に示すように,金属下地上に樹脂が接着した状態とはく離した状態のエネ ルギー差を界面破壊エネルギーと定義して接着強度を評価した.

樹脂の原子レベルモデリングの計算では,樹脂の最安定方位(ベンゼン環が金属表面に平行 となる方位)だけを用いる.その理由は,樹脂と金属の最密結晶面の界面におけるポテンシャ ルエネルギーをUとすると,熱処理して熱平衡状態となった界面においては,各樹脂方位の存 在確率は,ボルツマン exp(-U/kT)で表される(Uは負であり,前にマイナスをつける).し たがって,Uが最も低い方位,すなわち,ベンゼン環が金属表面に平行となる最安定な方位が 最も存在確率が高く,他の方位は指数関数的に存在確率が低くなる.したがって,現れる割合 の最も高い最安定方位だけを用いる.また,樹脂の1分子について図 5.4 に示す.

金属の最密結晶面は表面エネルギーが最も大きいために,他の結晶面に比べて高い割合で表面に現れていることが過去の多くのX線回折測定から確認されている.そこで本研究における金属の原子レベルモデリングの計算では,金属の最密結晶面(Cu,Alの場合には(111)面,Feの場合には(110)面)を用いる.最密結晶面が高い割合で表面に現れる理由は,統計熱力学から考え,各結晶面が表面に現れる割合は,熱処理して熱平衡状態となった表面においては,ボルツマン因子 $\exp(\gamma/kT)$ (γ は表面エネルギー,k はボルツマン定数,T は絶対温度)で表され,表面エネルギーの最も大きい最密結晶面が最も高い割合で表面に現れ,それ以外の結晶面は,表面エネルギーが小さいために指数関数的に表面に現れる割合が低くなるからである.

さらに,金属には表面に自然酸化膜が存在していることが多いが,本研究におけるエポキシ 樹脂と金属の界面の場合,熱処理した際に,酸素が金属側に拡散してしまい,界面近傍には酸 素がほとんど存在しなくなることから,本モデルでは酸化膜の無い表面だけを用いる.このよ うな現象は,分子動力学シミュレーションによって緩和計算をした場合にも同様に見られる.

計算に用いる金属と樹脂界面の分子構造は,厚さ 0.84 nm ×縦 2.3 nm ×横 2.3 nm の金属の 上に図 5.4 の樹脂分子が 16 個 (4 層 × 4 個/層)積層された構造を用いた.

また,分子動力学計算には, Accelrys 社 Materials StudioのDiscoverを用い,ポテンシャル として Consistent Valence Force Field (CVFF)を用いた [102].

CVFF ポテンシャルは古典分子動力学用ポテンシャル原子間相互作用と分子間相互作用によっ



Fig. 5.3: Method for calculating adhesive fracture energy.



Fig. 5.4: Molecular structure of crystalline-like resin.

て計算される.ポテンシャル原子間相互作用は共有結合の伸縮による図 5.5(a)の Morse (結合) 項 [103] と共有結合角の開閉による図 5.5(b)の Angle (結合角) 項および共有結合のねじりに よる図 5.5(c)の Torsion (二面角) 項によって式 (5.3)のようになる.また,共有結合していな い原子間の相互作用つまりポテンシャル分子間相互作用は図 5.6(a)の Lennard-Jones (Van der Waals エネルギー) 項 [104] と図 5.6(b)Coulomb (静電エネルギー) 項によって式 (5.4)のよう になる.

$$E = \sum_{b} D_{b} [1 - e^{-\alpha(b-b_{0})}]^{2} + \sum_{\theta} H_{\theta} (\theta - \theta_{0})^{2} + \sum_{\phi} H_{\phi} [1 + \cos(n\phi - \phi_{0})]$$
(5.3)

$$E = \sum_{i} \sum_{j>1} \left[\frac{A_{ij}}{r_{ij}^{12}} - \frac{B_{ij}}{r_{ij}^{6}} + \frac{Z_i Z_j e^2}{r_{ij}} \right]$$
(5.4)





(a) Morse term

(b) Angle term



(c) Torsion term

Fig. 5.5: Potential interatomic interaction .

20 において緩和計算を実施して得られた界面の構造を Cu, Fe, Al に対してそれぞれ図 5.7,5.8,5.9 に示す.これらの図は界面に垂直な方向から見た図であるが,すべての樹脂分子 と金属分子を示すとわかりにくいので,界面に最も近い樹脂分子1個と金属1原子層のみを示 した.ここで,定義した界面破壊エネルギーを計算するために,図5.7,5.8,5.9の接着状態か ら,樹脂と金属の間の原子間ポテンシャルを消し去って分離状態を形成した.この結果,界面破 壊エネルギーは,銅,鉄,アルミニウムに対してそれぞれ0.57 J/m²,0.46 J/m²,0.08 J/m² と得られ,分子計算よる界面破壊エネルギーの順番と実験による接着強度指標の順番が一致す る結果が得られた.


Fig. 5.6: Potential intermolecular interaction .



Fig. 5.7: Resin/copper interface structure obtained from molecular dynamics .



Fig. 5.8: Resin/iron interface structure obtained from molecular dynamics .



Fig. 5.9: Resin/aluminum interface structure obtained from molecular dynamics .

接着強度の順番を支配する因子として,分子動力学計算から,金属同士の場合には結晶格子 のミスマッチが重要となることが示されている [100] ので,格子ミスマッチに着目して考察を 行う.図 5.10(a),(b) はそれぞれ金属下地を上から見た模式図と横から見た模式図を示す.図 5.10(a),(b) で示すように原子を三角形格子に並べてできる原子間のくぼみに原子を置く(付着 する)のが最も安定すると考えられる.つまり,図 5.10(c),(d) で示すようように樹脂の分子と 金属下地の原子間の間隔が同じである場合には全ての原子を原子間のくぼみに置くことができ る.従って,格子マッチングが良い状態を示す.図 5.10(e),(f) で示すように樹脂の分子と金属 下地の原子間の間隔が異なる場合には原子間のくぼみに置くことができない原子が出てくる. 従って,格子ミスマッチが大きい状態を示す.

格子ミスマッチに着目して考察するために,図5.7,5.8,5.9において,六員環の第二近接原 子間距離(0.250 nm)と,金属中の最近接原子間距離とを比較して,あらためて図5.7を見る と,樹脂(原子間距離0.250 nm)と銅(原子間距離0.256 nm)のミスマッチは2%程度しか ないため,樹脂分子と銅結晶の原子が同じ周期で整然と並んでいることがわかる.

一方,図 5.9 では,格子ミスマッチが 0.250nm と 0.286 nm の相対差になるので,14 % 程度 あり,原子の並ぶ周期がずれて,配列が乱れていることがわかる.図 5.8 の場合には,鉄の格子 が長さ 0.248 nm と 0.286 nm の辺を持つ三角形で特徴付けられる構造となっているため,0.248 nm の辺については 0.250 nm との格子ミスマッチが 0.008 % しかないのに対して,0.286 nm の 辺については 14 % の格子ミスマッチがあるため,相性の良さが図 5.7 と図 5.9 の中間になって いる.

以上より, 接着強度は, 樹脂と金属(または金属酸化物)の格子ミスマッチが小さいほど高



(a) The metal ground seen from the top .



(c) The resin molecule and the metal ground



(b) The metal ground seen from the side .



(d) The resin molecule and the metal ground seen from the side .



(e) The resin molecule and the metal ground seen from the top .

(f) The resin molecule and the metal ground seen from the side .

Fig. 5.10: The concept of a lattice mismatch .

く,銅,鉄鋼,アルミニウムの順番に大きくなることがわかった.また,この順番と実験によ り求める接着係数の順番と一致することが確認できた.

5.3.2 分子動力学手法によるはく離モード II の接着強度評価

図 5.2(b) に示すモード II のような金属下地上に接合されている樹脂に変位を与えるシミュ レーションモデルを図 5.11 に示す.樹脂の分子すべてに変位を 0.25 nm 与えた時の原子構成の 一例を図 5.12 に示す.

界面でのすべりが見かけ上の界面破壊となり,これに相当するモード II の場合の界面破壊エ ネルギー(Interfacial fracture energy for mode-II) が定義できる.樹脂1分子についてモード I と同様に図 5.4 のような分子構造をもつ結晶性の高い樹脂を用いた.計算においては,厚さ 0.63 nm ×縦 2.3 nm ×横 2.3 nm の金属の上に図 5.4 の樹脂分子が1個置かれた構造を用いた. これは,層が多くなると,樹脂内部のせん断変形が界面破壊エネルギーに及ぼす影響が大きく なり,現象が複雑になるためである.

金属表面には,エネルギー的に安定で表面に現われやすい最密結晶面,すなわち面心立方構 造では(110)面が現われていることを仮定した.金属結晶上を樹脂が移動する方向によって界 面破壊エネルギーは変化するが,このような変化を考慮するためには統計処理するために膨大 な計算が必要となる.

本研究の計算では,簡易的に評価をおこなうため,界面破壊エネルギーが最も小さくなる[110] 方向を樹脂の移動方向として選択した.また,分子動力学計算には,モードIと同様に原子間ポ テンシャルとして Consistent Valence Force Field (CVFF)[102]を用いた.せん断シミュレー ションを行い,下地金属が銅,鉄,アルミニウムである場合に対する界面モデルでのエネルギー を,樹脂の変位に対してプロットした結果を図 5.13 に示す.変位が大きくなるとともに,界面 でのエネルギーが変化するが,この変化の中で最大値が界面破壊エネルギーに相当すると考え ると,この値は銅,鉄,アルミニウムに対してそれぞれ 0.65 J/m², 0.53 J/m², 0.09 J/m² と 得られた.



Fig. 5.11: Simulation model of Mode-II.



Fig. 5.12: Example of atomic configuration with displacement of 0.25 nm.



Fig. 5.13: Variation in energy at interface model due to applied displacement.

ここで,表 5.1 に示す第3章で測定した金属円柱の材料毎の最大せん断力 f_{smax} および残留応力により面圧力 $\sigma_{pm}A_0$ を用いて求められる接着強度指標とモード I による界面破壊エネルギーおよび,モード II による界面破壊エネルギーの比較を行う.

第3章で述べたように,最大せん断力は接着界面にはく離が生じるために必要な力を意味し, 面圧力 $\sigma_{pm}A_0$ は材料間の線膨張係数の差異と温度差から求める. A_0 は見かけ上の接着面積を 示す.

表 5.1 に示す面圧力 $\sigma_{pm}A_0$ を材料毎に比較すると, Fe の方が Cu より 25 % 大きいことがわ かる.これは樹脂と金属間の熱膨張の差が Fe の方が Cu より大きいからである.しかし,接着 時の最大せん断力 f_{smax} は表 5.1 に示すように Cu と Fe は同じである.つまり,面圧力が Fe よ リ小さい Cu の方が Fe より接着性が良いことを示すことになると考えられる.このような界面 の接着性に着目して新たに提案した接着係数 B と摩擦係数 μ による接着強度指標 (μ +B) [94] を用いると,最大せん断力は式 (5.5) のように表される.

$$f_{smax} \propto (\mu + B)\sigma_{\rm pm} A_0 \tag{5.5}$$

ここで,式 (5.5) は界面に十分な面圧が加わる条件の上で成り立つことを実験で確認している.式 (5.5) の最大せん断力 f_{smax} をそれぞれの材料毎の面圧 $\sigma_{pm}A_0$ で割ることで接着強度の指標 (μ + B)が得られる.つまり,接着強度指標は材料毎の面圧の影響を取り除いた界面の接着特性のみを表し,Cu,Fe,Al 順に大きい.従って,接着強度の指標 (μ + B)は接着界面にはく離が生じるために必要な力を求めるための指標と考えられる.接着強度指標とモードIに

Forces , Index	Cu	Fe	Al
$f_{\rm smax}$ (kN)	33	33	7
$\sigma_{\rm pm} A_0({\rm kN})$	59	75	44
$f_{ m smax}/\sigma_{ m pm} { m A}_0$	0.56	0.44	0.18

Table 5.1: Maximum shear force and interfacial pressure .

よる界面破壊エネルギーおよび,モード II による界面破壊エネルギーを表 5.2 に示す.表 5.2 に示すように接着強度の順番と傾向はモード I とモード II の界面破壊エネルギー共に実験より 求めた接着強度指標とほぼ一致することがわかる.

しかしがら,上記のモード 型の分子動力学計算は,モードI型より,圧縮面圧を受けつつ, 界面にせん断応力が加わっている実験の条件に近いが,計算結果からは,界面でのすべりが見 かけ上の界面破壊となっているので実験と同じ条件では界面すべりが起こるだけで,はく離は 生じないと考えられる.

Mat.	Adhesive strength index	Interfacial fracture energy	Interfacial fracture energy	
	($\mu+B$)	for mode-I ($\rm J/m^2$)	for mode-II ($\rm J/m^2$)	
Cu	0.56	0.57	0.65	
Fe	0.44	0.46	0.53	
Al	0.18	0.08	0.09	

Table 5.2: Adhesive strength index and interfacial fracture energy .

5.3.3 はく離の進展モードについて

分子動力学計算では,いわゆるモードI型の界面分離のエネルギーを計算しているが,実験 は,圧縮面圧を受けつつ,界面にせん断応力が加わっている(モード).しかしながら,分 子動力学で,実験と同じ条件の計算を行っても,界面すべりが起こるだけで,はく離は生じな い.これは,実際の界面にある表面粗さを計算では無視してしまっているために生じると考え られる. そこで,表面粗さが界面に及ぼす挙動を確認するために,観察した表面プロファイルを使って,有限要素法解析を行った.

図 5.14 は 150 倍拡大観察表面を 300 μ m × 300 μ m の領域を高さデータ h(x) の表面粗さをプロットしたものを示す.高さ 5 μ m の切削痕が見られる.

これらの表面形状の影響を取り入れ界面のはく離挙動を検討するために,図5.15(a)の表面粗 さを取り入れた図5.15(b)に示す軸対称有限要素法(FEM)モデルを作成しFEM解析を行っ た.半径方向に面圧を発生させ,軸方向にせん断負荷を加わる条件を設定した.



Fig. 5.14: Surface profile (μm) .

図 5.15(c) と図 5.15(d),それぞれに内部界面の半径方向応力分布と軸方向の応力分布を示す. 図 5.15(c) と図 5.15(d) ともに内部界面の山の傾斜付近(図 5.15(c) に点線表示)に樹脂側および アルミニウム側両方に引張応力が発生している.つまり、はく離は切削痕端部での引張応力によ り生じ進展すると考えられる.また,さらに細かい表面粗さのレベルまで見ても同様な現象が おこるものと考えられる.これらのはく離進展特性は Persson らも同様に指摘している [82-89].

このように実際の界面の表面粗さによってミクロに結合の解離(モードI型)が起こり,それによりはく離が進展しているものと考えられ,結合の解離を扱う分子動力学のモードI型の破壊エネルギーが本論文の実験のケースとの比較にも有効であると考えられる.



(a) Optically observed resin/aluminum

interface



(c) Stress distribution of radial direction



(b) Axially symmetrical FEM model



(d) Stress distribution of axial direction

Fig. 5.15: Resin/aluminum interface profile and its FEM analysis results .



Fig. 5.16: Comparison of adhesive strength of experiment and simulation.

5.3.4 モードIの界面破壊エネルギーと接着強度指標との比較

表 5.2 で示したミクロレベルの実験による接着強度指標と原子レベルの計算によるモード I型 の界面破壊エネルギーを,図 5.16 ように棒グラフで比較する.図 5.16 では,左の縦軸に計算結 果,右側の縦軸に実験結果の目盛りをとって示している.図 5.16 から,接着強度指標と界面破 壊エネルギーが同様の傾向を示し,銅に対する接着強度が最も強く,アルミニウムに対する接 着強度が弱いことがわかる.

図 5.16 に示すように接着強度指標が結合の解離を扱う原子レベルの計算と一致することから, その妥当性が検証され,界面の接着強度を表すひとつの指標としてあり得ると考えられる.また,原子レベルの計算は,5.3.1節で示した格子ミスマッチ等の接着強度を決定する支配因子を 把握できるという利点があるだけではなく,接着強度を効率的に予測できる利点があると考え られる.

以上の通り,インサート材や樹脂材が変更される度に樹脂モールド構造を製作し,インサート材と樹脂間のせん断力を測定する要素試験を行わなくても,原子レベルのシミュレーションで界面の接着強度を求め,FEM解析モデルに反映することで樹脂モールド製品における界面強度を正しく評価する事ができる.

5.4 実験と計算の比較に関する考察

5.3 節では,無次元である接着強度の指標と次元がある界面破壊エネルギーの定性的な比較を 行った.本章では同じ次元における実験と計算の比較のために,接着強度が一番大きい Cuの 場合について,実験と計算の定量的な比較を試みた.

5.4.1 定量的な比較の検討

Cuの接着強度の指標をエネルギーに換算するために,面圧を考慮したせん断力を用いる.したがって,実験結果により求める界面破壊エネルギーは最大せん断力 *f*_{smax} を用いて式 (5.6) によって求められる.

$$E_{\rm exp} = \frac{f_{\rm smax} x_{\rm exp}}{2A_0} \tag{5.6}$$

ここで, x_{exp} ははく離直前の弾性ひずみ量を表す.式 (5.6) による E_{exp} は 946 J/m² である. 計算結果の 0.573 J/m² と定量的に比較すると $E_{exp} \gg E_{MD}$ で 3 桁以上の差がある.これは, E_{exp} が試験系全体の弾塑性ひずみエネルギーである一方, E_{MD} は,界面の界面破壊エネルギー のみであるためである.変形を抑えて界面破壊エネルギーを求めた実験 [105] でも内部の変形 は完全に抑えることはできないため,大きな値が得られてしまう.実験より,界面エネルギー だけを抽出するのは困難であるため,エネルギーによる定量的な比較は難しいと考えられる.

そこで,公称破壊応力による比較を試みる.界面に全く欠陥がなく,理想的に結合している と仮定すると,界面を引き剥がすための応力は,以下の式 (5.7)のように,界面破壊エネルギー $E_{\rm MD}(0.573~{
m J/m^2})$ を,原子間距離 $\lambda_{
m atm}(0.31~{
m nm})$ で割ったものになる.

$$\sigma_{\rm MD} \approx \frac{2E_{\rm MD}}{\lambda_{\rm atom}} \tag{5.7}$$

式 (5.7) を用いた分子動力学による破壊応力 (σ_{MD}) は 3.67 GPa であり,実験で得られた最 大せん断力 33 kN を接着面積 3138 mm² で割った破壊応力 (σ_{exp}) は 0.01 GPa となる.した がって,公称破壊応力による定量的な比較では,分子動力学の結果が,実験結果より,2桁以上 大きいことがわかる.

このような実験と計算における破壊応力の違いの主な理由は,分子動力学の計算には,界面 状態に対する影響が全く反映されてないことが挙げられる.つまり,実験での界面の接着状態 は表面粗さの影響を受けて,部分的であり,真実接着面積は見かけよりも小さいと考えられる. Persson らも,表面粗さのスケール依存性を考慮したモデルによる検討 [77-81,84] が有効である提案している.そこで,本論文では界面状態の観察から分子動力学と実験のスケール差の定量的な検討による考察を試みた.

5.4.2 計算と実験のスケール差の定量的な検討

4.1 節での分子動力学による破壊応力と実験で得られた破壊応力との関係 ($\sigma_{\rm MD} \gg \sigma_{\rm exp}$)で 生じる差分の大きな原因は界面状態による有効接着面積の減少や界面に存在する欠陥が考えられる.

従来の界面問題は,基本的には次の二つの仮定の上で進められてきた.

物体間の接触領域ではクーロンの摩擦則が成立する.

接触面は体質的にはなめらかである.

Nayak [106] はこれらの二つの仮定から脱却した新しい接触論が考えられた.すなわち摩擦 は、物体表面間の接触結合の変形によって起こるものと考え、実験的観察とさらに粗い面接触 における静的な解析解が接触論の基礎となっている.この理論より垂直力と接線力の関数とし てのすべりに対する数値結果は、表面粗さの影響を示すパラメータに左右されること、さらに そのパラメータが大きいとき、すなわち表面が極めて粗いか垂直力が極めて小さい場合は、す べりと力の関係はかなり古典的摩擦論から相違するものであることなどが報告されている.

接着と摩擦の特性に対する粗さの影響は, Nayak によって定義された表面の粗さパワー・スペクトル C(q)(あるいはパワースペクトル密度)によって主として決定される.

そこで,本研究ではインサート材である金属円柱の表面粗さの詳細観察(ラフネスのスケー ル依存性)を行った.5.3.3 節で示した 300 μ m × 300 μ m の領域の高さデータ h(x) のラフネス をプロットした図 5.14 を用いる.切削痕高さ 5 μ m の図 5.14 の高さデータ h(x) のラフネスと パワースペクトルの関係を式 (5.8) のように表す [106].高さデータ h(x) の自己相関関数のフー リェ変換によって高さプロファイルのパワースペクトルになる Wiener-Khinchin の定理に基づ く(詳細は, Appendix A.1 参照).

$$C(q) = \frac{1}{(2\pi)^2} \int d^2x < h(x)h(0) > e^{-iqx}$$
(5.8)

ここで、< > はあらゆる位置を考慮したアンサンブル平均である.qは波数ベクトルを示し、 < h(x)h(0) >は高さデータh(x)の自己相関関数を示す.また,高さデータh(x)は式(5.9)の ように表すことができる.なお、本研究で用いた3種類の表面は表面仕上げを同一にしている ため、表面粗さのデータは材料間でほとんど違いがない.

$$h(x) = \int d^2q h(q) e^{iqx}$$
(5.9)

さらに,表面粗さ(高さの平均自乗平均の平方根)とパワースペクトルの関係は式(5.10)の ようにパワースペクトルの一次モーメントとして表す[77].

$$< h^2 >= \int d^2 q C(q) = 2\pi \int_0^\infty dq q C(q)$$
 (5.10)

ここで,パワースペクトルには,上限と下限があり,最も大きな波数ベクトルをqとすると $q = 2\pi/a$ が上限となり(aは格子定数),表面のサイズをLとして最も小さなベクトルを q_L と すると $q_L = 2\pi/L$ が下限となる.また,ある波長以下でC(q)が一定になる波長(roll-off)を q_0 とする.一般にこれらの定義を用いて,ラフネスは式(5.11)のように表し積分レンジに依存 することがわかる.

$$< h^2 > (q_0, q_1) = 2\pi \int_{q_0}^{q_1} dq q C(q)$$
 (5.11)

従って,面積AでのC(q)は式 (5.12)のように表される[77].

$$C(q) = \frac{(2\pi)}{A} < |h_A(q)|^2 >$$
(5.12)

ここで,測定された高さデータh(x)からC(q)を数値的に計算するためには,測定ポイントが格子定数a,および $x \ge y$ の座標に沿ったNデータポイントを備えた式 (5.13)に示すスクエア・メッシュを作成する必要がある.

$$x = (n_x, n_y)a = na = x_n \tag{5.13}$$

ここで, $n_x = 1, 2, ..., N \ge n_y = 1, 2, ..., N$ は整数である. さらに, フーリェ変換 h_A の積分を 個別の合計に近似することができ,格子面間隔 $q_L = 2\pi/L = 2\pi/N_a$ を備えたグリッド使用に より表面の有限サイズが波数ベクトル q 領域を制限するので,フーリェ変換もサンプリングも することができる.従って, q 領域は $q = (q_x, q_y) = (2\pi m_x/L = 2\pi m_y/N_a)$ となり, $h_A(q)$ は 式 (5.14) のように表すことができる.ここで, m_x , m_y は 0 から N - 1 の間の整数の数を示す. 本計算では, m_x , m_y は 64 としている.

$$h_{A}(q) \approx \frac{a^{2}}{(2\pi)^{2}} \sum_{n} h_{n} e^{-i2\pi N(m_{x}n_{x} + m_{x}n_{y})}$$

= $\frac{a^{2}}{(2\pi)^{2}} H_{m}$ (5.14)



Fig. 5.17: Surface roughness power spectra of aluminum cylinder .

ここで H_m は h_n の二次元の個別のフーリェ変換である.パワースペクトル C(q) の計算は式 (5.14) によって求めた $h_A(q)$ を式 (5.12) に代入して求める.式 (5.12) による求めたパワースペ クトル C(q) を用いて, $\ln q \ge \ln |C(q)|$ の関係を図 5.17 に示す.

また,高さプロファイルは多くの場合自己アフィン性を示す.自己アフィンフラクタルの表面である場合,高さ方向座標をz = h(x,y)とし, $x \to x/\zeta$, $y \to y/\zeta$ と置き換えると $z/\zeta^H = h(x/\zeta,y/\zeta)$ にあるので,h(x,y)は次式のように表される.

$$h(x,y) = \zeta^H h(a/\zeta, y/\zeta) \tag{5.15}$$

また,パワースペクトル式 (5.11)を $x o x^{'}/\zeta$, $y o y^{'}/\zeta$ で置き換えると,

$$C(q) = \frac{1}{(2\pi)^2} \int d^2x' \frac{1}{\zeta^2} < (\frac{x' + x_0'}{\zeta})h(\frac{x_0'}{\zeta}) > e^{-iq\frac{x}{\zeta}}$$
(5.16)

となり,式(5.16)のアンサンブル平均は式(5.15)により次式のようになる.

$$< h(\frac{x' + x'_{0}}{\zeta})h(\frac{x'}{\zeta}) > = < \frac{1}{\zeta^{H}}h(x' + x'_{0})\frac{1}{\zeta^{H}}h(x'_{0}) >$$
$$= \frac{1}{\zeta^{H}} < h(x' + x'_{0})h(x'_{0}) >$$
(5.17)

さらに,式(5.17)を式(5.16)に代入すると式(5.18)になる.

$$C(q) = \frac{1}{2\pi)^{2}} \zeta^{-2(H+1)} \int d^{2}x' < h(x' + x_{0}')h(x_{0}') > e^{-iq\frac{x'}{\zeta}}$$
(5.18)

ここで , $\zeta = |q|$, $q/|q| = \hat{q}$ とおくと , 式 (5.19) になる .

$$C(q) = |q|^{-2(H+1)} \frac{1}{(2\pi)^2} \int d^2 x' < h(x' + x'_0)h(x'_0) > e^{-i\hat{q}x'}$$

= $|q|^{-2(H+1)}C(\hat{q})$ (5.19)

従って,自己アフィンフラクタルの表面では, $x \to \zeta x$, $y \to \zeta y$, $z \to \zeta^H z$ の投写により,パワースペクトルは次の式 (5.20)のように表される.

$$C(q) \approx q^{-2(H+1)}$$
 (5.20)

ここで ζ , *H* はスケール毎の拡大係数と Hurst 数を示す.ラフネスはおよそ自己アフィン性を 有し, Hurst 数はおよそ, 0.25 であった.ただし,図 5.17 に示すようにある波長以下ではC(q)が一定となるロールオフ(Roll-off)波長が存在するため, Hurst 数の算出においては無視して いる.

次に自己アフィン性の指標である Hurst 数(フラクタル次元に相当)を使った有効接触面積 の減少を見積る.本研究で取り上げた界面は,モールド構造であり,硬化時に非接着部分が作 られると考えられ,現象は複雑であるが,ここでは考察のため,最も接着が弱いケースとして, 平滑な高分子と表面粗さを有する金属の接触面積の計算式により見積もる.真実接触面積は,式 (5.21)のように Persson らによって定義されている(詳細は,Appendix A.2 参照)[84].真実 接触面積はパワースペクトル C(q)に依存し,押し付け荷重 $F_N = \sigma_{pm}A_0$ に比例した定義にな る.ここで A_0 はみかけの接触面積で, σ_{pm} は面圧である.

$$\mathbf{A} = (2\pi)^{\frac{1}{2}} \frac{F_N}{E^*} (\int d^2 q q^2 C(q))^{-\frac{1}{2}}$$
(5.21)

ここで, $E^* = E/(1-\nu)$, E は二物体間の有効弾性係数 $(1-\nu)/E = (1-\nu_1)/E_1 + (1-\nu_2)/E_2$ である. C(q) は高さプロファイル h(x) のパワースペクトルは式 (5.8) で表される. 金属表面に 対して,実際に測定したパワースペクトル C(q) による, $\ln q \ge \ln |C(q)|$ の関係を示す図 5.17 のように,自己アフィン性を示す.自己アフィン性の指標である Hurst 数 (フラクタル次元に 相当)を使った有効接触面積比 $P(\varsigma) = A(\varsigma)/A_0$ は式 (5.22) のようになる.ここで, ς は拡大係 数 (スケール)を示す.

$$P(\varsigma) = \frac{4\sigma(1-\nu^2)}{q_0 h_0 E} \left(\frac{1-H^{\frac{1}{2}}}{\pi H}\right) \varsigma^{H-1}$$
(5.22)

ここで, $\varsigma \gg 1$ において < $h2 >= h_0^2/2$, q_0 は Roll-off 波数ベクトルを示す. $q \ge \varsigma$ の間には, $q = q_L \quad (q_L = 2\pi/L, L$ はサンプルの大きさ)の関係がある.

図 5.18 は式 (5.22) による有効接触面積比 $P(\varsigma)$ と拡大係数 (スケール) ς との関係を示す.図 5.18 に示すように有効接着面積が 1/2 の減少で収束している.しかしながら,実験で得られた 最大せん断力 33 kN を接着面積 (A_0 =3138 mm²) で割った破壊応力 (σ_{exp}) 0.01 GPa から, 有効接着面積の減少率 0.5 を考慮しても,破壊応力 (σ_{exp})は 0.02 GPa と差分への影響は大き くないことがわかる.

そこで,界面に存在する初期欠陥を考慮した破壊応力は,原子間を引き離す際なされた仕事 と破面を生成するのに費やされたエネルギーが等しいとして得られる(Orowan のへき開強度) 式 (5.23)を用いて求める [99].を評価することから求められる.

$$\sigma'_{\rm MD} \approx \sqrt{\frac{E_{\rm MD}E^*}{\lambda_{\rm crack}}} \tag{5.23}$$

ここで, $E_{\rm MD}$ は界面破壊エネルギー (0.573 J/m²)を示し, $E^* = E(1-\nu^2)=14.6$ GPa, E は 二物体間の有効弾性係数 [87] $(1-\nu^2)/E = (1-\nu_{\rm Cu}^2)/E_{\rm Cu} + (1-\nu_{\rm Resin}^2)/E_{\rm Resin}$ で示し, $\nu_{\rm Cu}$ は Cuのポアソン比 0.34, $E_{\rm Cu}$ は Cu のヤング率 117 GPa, $\nu_{\rm Resin}$ は樹脂のポアソン比 0.29, $E_{\rm Resin}$ は樹脂のヤング率 15 GPa である.

 $\lambda_{
m crack}$ は初期欠陥サイズを示し,式 (5.23)により定量的な比較を行うためには,欠陥サイズ



Fig. 5.18: Relation between effective contact area and wave vector .

を考慮しなければならない.破壊応力の桁違いの差分 ($\sigma_{MD} = 3.7 \text{ GPa} \geq \sigma_{exp} = 0.02 \text{ GPa} の 差) をなくすために必要とされる初期欠陥のサイズは約 0.02 mm となることがわかる.なお,$ 本研究の実験に用いた樹脂材料の許容初期欠陥サイズ (カタログ値) が 0.1 mm であることから, 0.02 mm の欠陥サイズは定量的な評価のための初期欠陥のサイズとしてあり得ないサイズではないと考えられる.

以上,界面状態の観察から分子動力学と実験のスケール差の定量的な検討を行った.計算と 実験の破壊応力の差分の大きな原因として考慮した界面状態による有効接着面積の減少より界 面に存在する欠陥サイズの影響の方が大きいと考えられる.つまり,はく離は界面状態による 界面結合の不完全性が支配的であると考えられる.

5.5 結言

本章ではマクロレベルのはく離実験の界面特性により得られた接着強度指標に相当する界面の 接着強度を計算で求めることを検討した.本研究においては,界面接着強度を表すひとつの指標 として,界面の結合の解離を扱う分子動力学法により求められる界面破壊エネルギー(Interfacial fracture energy)を定義し,それを用いて,Cu,Fe,Alの三種類の材料とエポキシ樹脂間の界 面の接着強度(界面破壊エネルギー)を求めた.計算による界面破壊エネルギーと実験による 接着強度指標との定性的な比較を行い,ほぼ一致していることを確認し,計算による接着強度 の予測が可能であることを示した.

界面はく離進展モードのメカニズムについて,本研究における樹脂モールド構造のはく離実 験では圧縮面圧を受けつつ,界面にせん断応力が加わっている(モードII型)が,実際の界面 は表面粗さによってミクロに結合の解離(モードI型)が起こり,それによりはく離が進展し ているものと考えられる.したがって,結合の解離を扱う分子動力学のモードI型の破壊エネ ルギーが本研究の実験のケースとの比較にも有効であると考えられる.

さらに,内部接着界面のメカニズムを把握することで界面の接着強度の支配因子を検証した. ナノスケールの化学結合とミクロスケールのはく離強度の関わり合いについて,主に表面粗さ の影響に着目しながら考察した.計算と実験の破壊応力の差分(2桁)の大きな原因として有 効接着面積の減少と初期欠陥の存在が考えられ,界面状態を考慮し見積った.結果,計算と実 験の差分の原因は界面状態による有効接着面積の減少(1/2減少)の影響より,界面に存在する 欠陥サイズ(0.02 mm)の影響の方が大きいと考えられ,界面接着強度の支配因子は界面状態に よる界面結合の不完全性が支配的であると考えられる.

第6章 結論

6.1本研究の結論

樹脂材料は軽量で高強度の特性を持つことから,金属やセラミックを樹脂でモールドした絶縁 ロッドや絶縁容器などの絶縁体として電力機器に幅広く利用されている [1], [2].樹脂モールド 構造による電力機器などの製品は内部界面強度を正しく評価することによって,信頼性を向上 させることができる.

樹脂モールド構造の金属と樹脂間の界面には,摩擦力と接着力および面圧が作用し,これら の力が樹脂モールド構造全体の挙動に大きな影響を与える.そのため,樹脂モールドのような 界面の強度を正しく評価するためには,これらの力をすべて考慮し,界面強度を評価する手法 が必要がある.

本研究では、樹脂モールド構造の界面生成のプロセスを把握するために、はく離実験に用い る試験体のモールドプロセスを通してモールド時に界面に働く力や樹脂層に発生する応力を明 らかし、インサート金属の表面状態や、樹脂と金属が一体化された界面状態の観察によりプロ セス時の界面における樹脂の挙動を示した.また、樹脂モールド構造の金属と樹脂間の界面強 度に関する実験的な検討により界面の接着特性を求め、界面挙動をモデル化し、解析モデルに 反映することで樹脂モールド製品における界面強度の評価手法を構築した.また、実験実施前 の計算による界面接着強度評価手法と界面強度の発現機構を検討するために、界面接着強度を 表すひとつの指標として、界面結合の解離を扱う原子レベルモデリングにより求められる界面 破壊エネルギーを定義した.

接着界面強度の支配因子を把握するために検討した手法を Cu, Fe, Al の三種類の材料とエポ キシ樹脂間の界面に適用し, ミクロレベルのはく離実験により得られた界面の接着強度指標と ナノレベルの分子動力学法の計算により得られた界面破壊エネルギーとの定性的な比較を行っ た.また,ナノスケールの化学結合とミクロスケールの界面接着強度の関わり合いについて,主 に表面粗さの影響 [28,75,77-82,82-89] に着目しながら考察した.

- (1) 樹脂の体積変化と温度変化の関係から考えられる熱硬化型エポキシ樹脂の硬化過渡は,加熱による温度上昇で,液状状態で熱膨張し,次に,硬化反応により樹脂の2次元的架橋が始まり,体積収縮を伴いながらゲル点に到達する.エポキシは固体としての挙動に移行し,ここから3次元的架橋に移り,これの終点である硬化点に到達する.さらに,冷却過程を経て,室温に戻る.
- (2) 樹脂層に発生する応力は樹脂が硬化するときに起こる体積変化によるもの(硬化収縮率による応力)と樹脂と金属の熱膨張係数の差異による歪に起因する熱応力および,金属およびモールド体の形状による応力集中などが存在する.
- (3) モールド製作プロセスの中で液体樹脂から固体樹脂までの硬化過程をひずみセンサーに よて測定した結果、1次硬化および2次硬化における硬化反応によるひずみはクリープひ ずみの発生によりリセットされ、残留応力に起因するのは主に徐冷で常温に戻す際に発生 する熱ひずみであることを明らかにした。
- (4) 熱変形による影響を確認するために液状状態での樹脂と固体状態での樹脂の変形を測定した結果,熱変形によるへこみ高さはAl,Cu,Fe,それぞれ0.12 mm,0.14 mm,0.16 mm であり,理論計算による熱変形量(線膨張係数の差×温度差×金属円柱軸方向距離)はAl,Cu,Fe,それぞれ0.10 mm,0.12 mm,0.13 mm でほぼ同じであること確認できた.
- (5) 樹脂と金属の接着界面観察により金属表面に切削痕のような周期的ラフネスが存在する ことと、樹脂がそのラフネスに沿って流れ込んで固まっていることがわかった.しかし、 円周方向に沿った樹脂と金属間の界面隙間は観察測定が難しく確認は困難である.液状樹 脂は樹脂成分の分子レベル大きさと同じレベルのラフネスまでは流れ込むと考えられる が.その後の固体状態で徐冷で常温に戻す際に発生する 0.1 mm レベル熱変形によって, 部分的な剥離の可能性を示した.

次に第3章では,モールドプロセスによて製作した試験体を用いて,試験体の内部接着界面のはく離実験行い金属と樹脂間の接着界面に生じるせん断力を測定した.また,樹脂モールド 構造の金属と樹脂間の界面に作用する摩擦力と接着力および面圧力と測定せん断力との関係を 確認し,これらの力が樹脂モールド構造全体の挙動に及ぼす影響を検討した.

- (1) 測定したせん断力から樹脂モールド構造の金属と樹脂間の界面には,摩擦力と接着力および面圧が作用していることを確認し,モールド時の残留応力によって接着界面に働く面圧とせん断力との関係が比例の関係であることを明らかにした.
- (2) 内部接着界面の剥離実験結果により,樹脂モールド構造の界面せん断強度の限界までは摩擦力 $f_{\rm f}$ と接着力 $f_{\rm B}$ の両方が作用し,金属円柱が樹脂界面をすべりだすと接着力 $f_{\rm B}$ はなくなり,摩擦力 $f_{\rm f}$ だけが作用することがわかった.また,インサート材質の比較から接着力 $f_{\rm B}$ は銅が最も大きく,その値は 22 kN であり,摩擦力 $f_{\rm f}$ は鉄鋼が最も大きく,その値は 13 kN である.

次に第4章では,第3章の実験により求めた金属製の円柱と樹脂間のせん断力を用いて,接 着強度指標による三つの力(摩擦力,接着力,残留応力による面圧)の分解と,界面に作用す る力のモデル化を行い,分解した3つの力を非線形ばねを使った単純モデルでモデル化し,そ のモデルを用いて接着・摩擦有限要素解析手法を提案した.また,提案手法の妥当性を検討し, 界面の特性を再現できることを示した.さらに,樹脂モールド構造の内部界面の接線方向はせ ん断ばね(接着強度指標を用いるせん断力によるばね定数)とし,法線方向は垂直ばね(樹脂 のヤング率から求まるペナルティ剛性によるばね定数)とするモデル化を行うことで,実機部 品である絶縁ロッドの破断強度試験がよくシミュレートできることを示した.

- (1) 界面に剥離が生じる直前までに作用する摩擦力以外の力を"接着力"と定義し、それを規定する"接着係数"、"接着強度指標"を新しく導入することで、残留応力による面圧に依存する摩擦力と接着力で構成される接触界面をモデル化および定式化を行った.また、この接着係数が、接触する材料間の接着強度に対応することを示した。
- (2) 接着・接触力を考慮している本手法を絶縁ロッド製品の強度評価に適用した.絶縁ロッド 製品モデルの特徴により,鉄鋼材側面と接触している樹脂界面での剥離が生じる前に樹脂 の最大引張応力が鉄鋼材底面と接触している樹脂界面で樹脂の引張強さ(43 MPa)に達 し,樹脂破壊が生じ,結果,63 kNが臨界の引張力となることがわかった.実験では64 kN,68 kN,70 kNが臨界の引張力となる.したがって,樹脂モールド構造の内部界面の 接線方向はせん断ばね(接着強度指標を用いるせん断力によるばね定数)とし,法線方向 は垂直ばね(樹脂のヤング率から求まるペナルティ剛性によるばね定数)とするモデル化 を行うことで,実機部品である絶縁ロッドの破断強度試験がよくシミュレートできること を示した.

最後に第5章では,界面接着強度を表すひとつの指標として,界面結合の解離を扱う原子レベ ルモデリングにより求められる界面破壊エネルギーを定義し,マクロレベルのはく離実験の界 面特性により得られた接着強度指標に相当する界面の接着強度を計算で求め,界面強度の発現 機構を検討した.界面の結合を分子動力学法によるモデリングを行い,界面破壊エネルギーを 求め,マクロレベルの接着強度指標とナノレベルの界面破壊エネルギーの定性的な比較を行っ た.また,内部接着界面のメカニズムを把握することで界面の接着強度を検証した.さらに,樹 脂モールド時の界面生成のプロセスの観点から,マルチスケールでの界面状態を考慮し定量的 な比較を行うと共に,定量的な接着強度予測の可能性を示した.

- (1)本章ではマクロレベルのはく離実験の界面特性により得られた接着強度指標に相当する 界面の接着強度を計算で求めることを検討した.本研究においては,界面接着強度を表す ひとつの指標として界面破壊エネルギー(Interfacial fracture energy)を用いるとし,界 面の結合の解離を扱う分子動力学法により,Cu,Fe,Alの三種類の材料とエポキシ樹脂 間の界面の接着強度(界面破壊エネルギー)を求める.計算による界面破壊エネルギーと 実験による接着強度指標との定性的な比較を行い,ほぼ一致していることを確認し,計算 による接着強度の予測が可能であることを示した.
- (2) 界面はく離進展モードのメカニズムについて、本研究における樹脂モールド構造のはく離 実験では圧縮面圧を受けつつ、界面にせん断応力が加わっている(モードII型)が、実際の界面は表面粗さによってミクロに結合の解離(モードI型)が起こり、それによりは く離が進展しているものと考えられる.したがって、結合の解離を扱う分子動力学のモー ドI型の破壊エネルギーが本研究の実験のケースとの比較にも有効であると考えられる.
- (3)内部接着界面のメカニズムを把握することで界面の接着強度の支配因子を検証した.ナ ノスケールの化学結合とミクロスケールのはく離強度の関わり合いについて,主に表面 粗さの影響に着目しながら考察した.計算と実験の破壊応力の差分(2桁)の大きな原因 として有効接着面積の減少と初期欠陥の存在が考えられ,界面状態を考慮し見積った.結 果,計算と実験の差分の原因は界面状態による有効接着面積の減少(1/2減少)の影響よ り,界面に存在する欠陥サイズ(0.02 mm)の影響の方が大きいことが考えられ,はく離 は界面状態による界面結合の不完全性が支配的であると考えられる.

6.2 製品開発における本研究成果の位置付けと今後の展開

樹脂材料は軽量で高強度の特性を持つことから,金属やセラミック製の円筒を樹脂でモール ドした絶縁ロッドや絶縁容器などの絶縁体として電力機器に幅広く利用されている.

電力機器に用いる樹脂絶縁体は,絶縁性能を確保するために樹脂と金属間に強固な接着が要 求され,その樹脂モールド構造の内部界面強度を正しく評価することによって,電力機器の信 頼性を向上させることができる.

電力機器などの樹脂モールド構造は高機能化や低コスト化,小型化に対応する形で変遷を重 ね,今日に至っている.これらの変遷のなかでも普遍的な技術課題がありながら,樹脂モール ド構造の内部界面強度を正しく評価するための界面接着強度評価手法の提案において,本研究 の研究意義は高いと考えている.昨今の電力機器の樹脂モールド構造への適用が大幅に拡大し ている中で,構造信頼性設計の観点からその設計マージンの確保が益々厳しい状況になってい る.そのような背景において,これまでのような界面剥離を許容した樹脂モールド設計では困 難を極めてきており,樹脂接着界面の剥離防止設計を前提とした限界設計への挑戦は必至であ ると考える.本研究成果はその挑戦を他社に先駆けて進めていく上での重要な技術的武器であ り,今後,本論文の手法を製品開発への適用と他の材料へ展開,更なる高信頼化が要求される 自動車等への適用拡大,樹脂モールド内部界面の結合状態の詳細観察,表面状態の操作などに よる界面接着性向上技術の提案を含めて,本研究成果の応用展開を図っていきたい.

6.3 提案手法の将来の展望

樹脂接着界面の剥離防止設計を前提とした限界設計への挑戦のために,本研究が進めてきた 接着界面強度予測手法に加え,接着界面の強度の操作ができる技術の確立が必要である.

そのために,今後は先進的力学系理論を用いてシミュレーションによるマルチスケール現象 の再現および解明と共に,マルチスケール機械システムを実現するための先端計測および精密・ 微細加工技術を確立する.例えば,界面活性剤を利用するということによってガスと金属酸化 物の気質の間の接触面積を最大化して,スプレー熱分解による新しいコーティング方法を適用す るということによって,熱処理温度を低くして数ナノメートル大きさの粒子を持つ均一なナノ細 工型決定性複合金属酸化物薄膜を得ることができるなど金属やセラミックスの表面の性質を操 作することで樹脂との接着界面の強度や絶縁性能の向上が期待できると考えられる.

また,マルチスケールでの表面計測の技術の拡張としてナノ技術を利用した生体模倣機能性 表面技術に関する研究を行う.最近,超疏水性および超接着性機能性表面の原理を理論的に分 析してこれを工学的に応用しようとする研究が全世界的に急激に増加している.その理由は自 然界に存在する多くの機能性原理の中で超疏水性表面と超接着性表面を我々が正確に模写でき るならば、日常生活の便宜性を高める新しい製品からマイクロ流体力学同じ専門研究領域に至る までその応用範囲が無尽蔵なためである.特に米国が90年代後半に入って本格的な研究を始め ることによってナノ技術を利用した生体毛紡技術に対する研究が世界的に急速に広がったと考 えられる.最近ナノ技術の急速な発展と研究開発拡大とかみ合わさって商業化適用のための生 体模倣材料開発の重要性はより一層浮び上がると予想される.

付録A

A.1 Wiener-Khinchin Theorem

関数 f(x) のフーリエ変換を F(k) とすれば,

Fourier 変換:
$$F(k) = \int_{-\infty}^{\infty} f(x)e^{2\pi i kx} dx$$
 (A.1)

逆 Fourier 変換:
$$f(x) = \int_{-\infty}^{\infty} F(k)e^{-2\pi i kx} dk$$
 (A.2)

この定義は結晶学の分野で伝統的に使われている定義で,W.H. Press らの「Numerical Recipes in C」(技術評論社,1995年)でも推奨されている定義方法である.

超関数のフーリエ変換における, Dirac のデルタ関数 $\delta(x)$ について,

$$\int_{-\infty}^{\infty} f(x)\delta(x) = f(0) \tag{A.3}$$

という性質から,

$$\int_{-\infty}^{\infty} \delta(x) e^{2\pi i k x} dx = \int_{-\infty}^{\infty} \delta(x) e^{-2\pi i k x} dx$$
$$= 1$$
(A.4)

$$\int_{-\infty}^{\infty} e^{2\pi i k x} dx = \int_{-\infty}^{\infty} e^{-2\pi i k x} dx$$

= $\delta(x)$ (A.5)

という関係が成り立つ.つまり、デルタ関数の Fourier 変換は1 になり、1 の Fourier 変換が デルタ関数である.デルタ関数の微分 $\delta'(x)$ の Fourier 変換は

$$\int_{-\infty}^{\infty} \delta'(x) e^{2\pi i k x} dx = [\delta(x) e^{2\pi i k x}]_{-\infty}^{\infty} - 2\pi i k x \int_{-\infty}^{\infty} \delta(x) e^{2\pi i k x} dx$$
$$= 2\pi i k$$
(A.6)

であり、デルタ関数の n 階微分 $\delta^{(n)}(x) = \frac{d^n d(x)}{dx^n}$ の Fourier 変換は,

$$\int_{-\infty}^{\infty} \delta^{n-1}(x) e^{2\pi i kx} dx = [\delta(x) e^{2\pi i kx}]_{-\infty}^{\infty} - 2\pi i kx \int_{-\infty}^{\infty} \delta(x) e^{2\pi i kx} dx$$
$$= -2\pi i k \int_{-\infty}^{\infty} \delta^{n-1}(x) e^{2\pi i kx} dx \qquad (A.7)$$

であることから,一般的に

$$\int_{-\infty}^{\infty} \delta^{n-1}(x) e^{2\pi i k x} dx = (-2\pi i k)^n \tag{A.8}$$

と書ける. Convolution と相関について, 2つの関数 f(x), g(x) の Convolution は

$$f(x)^*g(x) = \int_{\infty}^{\infty} f(x-y)g(y)dy$$
(A.9)

で定義される. Convolution の代わりに接合積とか合成積と呼ばれることもある. デルタ関数 の性質から,ある関数をデルタ関数と Convolution による結果は元の関数と必ず等しくなるこ とは容易にわかる. 関数 f(x), g(x) それぞれの Fourier 変換が

Fourier 変換:
$$F(k) = \int_{-\infty}^{\infty} f(x)e^{2\pi i kx} dx$$
 (A.10)

Fourier 変換:
$$G(k) = \int_{-\infty}^{\infty} g(x)e^{2\pi i kx} dx$$
 (A.11)

であるとすると, Cinvolutionの Fourier 変換は

$$\int_{-\infty}^{\infty} [f(x)^* g(x)] e^{2\pi i k x} dx = \int_{-\infty}^{\infty} [\int_{-\infty}^{\infty} f(x-y)g(y)dy] e^{2\pi i k x} dx \quad (A.12)$$

ということになるが、積分の順序を交換すれば、 = $\int_{-\infty}^{\infty} g(y) [\int_{-\infty}^{\infty} f(x-y)e^{2\pi i k x} dx] dy$
= $\int_{-\infty}^{\infty} g(y) [\int_{-\infty}^{\infty} f(x-y)e^{2\pi i k (x-y)} dx] e^{2\pi i k x} dy$
= $F(k) \int_{-\infty}^{\infty} g(y)e^{2\pi i k (x-y)} dy$
= $F(k)G(k)$ (A.13)

となる.つまり, Convolution の Fourier 変換は Fourier 変換の積に等しくなる.これを Convolution theorem と呼ぶ.これらの定義を基に 2 つの関数 f(x), g(x) の相関 (Correlation) は

$$\operatorname{Corr}[f(x)g(x)] = \int_{-\infty}^{\infty} f(x+y)g(y)dy$$
(A.14)

で定義される.これは $f(x) \ge g(-x) \ge o$ Convolution と同じことである.相関の Fourier 変換は,

$$\int_{-\infty}^{\infty} \operatorname{Corr}[f(x)g(x)]e^{2\pi i k(x-y)}dx = \int_{-\infty}^{\infty} [\int_{-\infty}^{\infty} f(x+y)g(y)dy]e^{2\pi i kx}dy$$

$$\geq \text{NOCLETSOM}, \quad \text{積分の順序を交換すれば}, \quad = \int_{-\infty}^{\infty} g(y)[\int_{-\infty}^{\infty} f(x+y)e^{2\pi i kx}dx]dy$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} g(y)[\int_{-\infty}^{\infty} f(x+y)e^{2\pi i k(x+y)}dx]e^{-2\pi i kx}dy$$

$$= F(k)\int_{-\infty}^{\infty} g(y)e^{-2\pi i k(x-y)}dy$$

$$= F(k)G(-k) \quad (A.15)$$

となる.さらに,関数g(x)が実関数(実数値を取る関数)の場合には, $G(-k) = G^*(k)$ (ただ し $G^*(k)$ はG(k)の複素共役)という関係があるので,

$$\int_{-\infty}^{\infty} \operatorname{Corr}[f(x)g(x)]e^{2\pi i k(x-y)}dx = F(k)G^*(k)$$
(A.16)

という関係が成り立つ.つまり,相関の Fourier 変換は, Fourier 変換と Fourier 変換の複素 共役との積に等しくなる.この関係は相関定理 (Correlation theorem) と呼ばれる.特に g(x)が f(x) に等しいとき,

$$\operatorname{Corr}[f(x)g(x)] = \int_{-\infty}^{\infty} f(x+y)g(y)dy$$
(A.17)

のことを自己相関 (Autocorrelation) と呼ぶ. 従って,

$$\int_{-\infty}^{\infty} \operatorname{Corr}[f(x)f(x)]e^{2\pi i kx} dx = F(k)F^*(k) = |F(k)|^2$$
(A.18)

という関係が導かれるが,この関係をウィーナーヒンチン (Wiener- Khinchin)の定理と呼ぶ. ここで,信号の全パワーは

$$\int_{-\infty}^{\infty} |F(k)|^2 dx = \int_{-\infty}^{\infty} f^*(x) f(x) dx \tag{A.19}$$

で表されるが,信号のフーリエ変換について同様の計算をしても,

$$\int_{-\infty}^{\infty} |F(k)|^2 dk = \int_{-\infty}^{\infty} F(k)^* F(k) dk$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} [\int_{-\infty}^{\infty} f^*(x) e^{-2\pi i k x} dx] [\int_{-\infty}^{\infty} f(y) e^{2\pi i k y} dy] dk$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} f^*(x) \int_{-\infty}^{\infty} f(y) \int_{-\infty}^{\infty} e^{2\pi - i k y (y-x)} dk dy dx$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} f^*(x) \int_{-\infty}^{\infty} f(y) \delta(y-x) dy dx$$

$$= \int_{-\infty}^{\infty} f^*(x) \int_{-\infty}^{\infty} f(y) dx \qquad (A.20)$$

A.2 有効接触面積

有効接触面積は観察するスケールの倍率 ς に依存する.また,接触領域の応力分布(頻度) $P(\sigma,\varsigma)$ もスケール ς に依存し,式 (A.21)の拡散タイプの微分方程式で表すことができる [77,84]. ここでスケール $\lambda = L/\varsigma$, $A(\varsigma = 1) = A_0$, $q_L = 2\pi i/L$, $q = q_L\varsigma$, $A_0 \sim L_2$ 間の有効接触面積 比は $P(\varsigma) = A(\varsigma)/A_0$ と定義する.

$$\frac{\partial P(\sigma,\varsigma)}{\partial\varsigma} = f(\varsigma)\frac{\partial P(\sigma,\varsigma)}{\partial\sigma^2} \tag{A.21}$$

ここで, $f(\varsigma) = G' \sigma_0^2(\sigma_0 \ \mathsf{LPm} \mathsf{Im} \mathsf{Im$

$$G(\varsigma) = \frac{\pi}{4} \left(\frac{E^*}{\sigma_0}\right) \int_{q_L}^{\varsigma q_L} dq q^3 C(q) \tag{A.22}$$

ここで , $E*=E/(1-\nu)$, E は二物体間の有効弾性係数 $(1-\nu)/E=(1-\nu_1)/E_1+(1-\nu_2)/E_2$ である .

弾性変形のみが生じるとすると,有効接触面積比 P(ς)は次の式 (A.23) になる.

$$P(\varsigma) = \int_0^\infty d\sigma P(\sigma,\varsigma)$$

= $\frac{2}{\pi} \int_0^\infty dx \frac{\sin x}{x} e^{x^2 G(\varsigma)} = \operatorname{erf}[\frac{1}{2\sqrt{G}}]$ (A.23)

式 (A.23) をテイラー級数展開して微分方程式に代入すると (A.24) が導出される [79,80].

$$P(\sigma,\varsigma) = \sum_{n=1}^{\infty} A_n(\varsigma) \sin(\frac{n\pi\sigma_0}{\sigma_Y})$$
(A.24)

ここで,荷重による応力 σ_0 が微小の場合 $G \gg 1$ となるので, $P(\varsigma) = P_1(\varsigma) = (\pi i G(\varsigma))^{-1/2}$ となる.つまり $G = 1 / \frac{0}{2}$ より,有効接触面積比 $P(\varsigma)$ は荷重 σ_0 に比例することになり,次の式 (A.25) のように表される.

$$P(\varsigma) = \operatorname{erf}(\frac{\sqrt{\pi}}{2}P_1(\varsigma) \tag{A.25}$$

この理論により,有効接触面積は荷重(微小) $F_N = \sigma A_0$ に比例して増加するので, $P_1(\varsigma) = (\pi i G(\varsigma))^{-1/2}$ に式 (A.22)を代入すると式 (A.26)が導かれる.

$$A(\varsigma) = (2\pi)^{\frac{1}{2}} \frac{F_N}{E^*} (\int d^2 q q^2 C(q))^{-\frac{1}{2}}$$
(A.26)

Hurst 数を使うと式 (A.26) は式 (A.27) になる.

$$P(\varsigma) = \frac{4\sigma_0(1-\nu^2)}{q_0h_0E} (\frac{1-H}{\pi H})^{1/2} \varsigma^{H-1}$$
(A.27)

ここで , $\varsigma \gg 1$ において $< h^2 >= h_0^2/2$ を示す .

参考文献

- T. Okamoto, M. Shibuya, T. Takahashi, Y. Mizutani, and T. Takahashi. Proposal of all solid insulated substation for future substation. *IEEE 7th Intern. Conf. Properties* and Application of Dielectric materials, Vol. S22-4, pp. 1190–1193, 2003.
- [2] J. Sato, O. Sakaguchi, N. Kubota, S. Makishima, S. Kinoshita, T. Shioiri, T.Yoshida, M. Miyagawa, M. Homm, and E. Kaneko. New technology for medium voltage solid insulated switchgear. *IEEE/PES Transmission and Distribution Conference and Exhibition: Asia Pacific.*, Vol. 3, pp. 1791–1796., 2002.
- [3] 新保正樹. エポキシ樹脂ハンドブック, . エポキシ樹脂. 日刊工業新聞社, 1987.
- [4] 昭晃堂, 編集垣内弘. 新エポキシ樹脂. 9. 注型・ポッティング・エンキャプシ 9.2. エポキシ樹脂の重電機器への応用, 1985.
- [5] 今井隆浩. ナノコンポジット技術による熱硬化性樹脂の高性能化に関する研究. 学位論文, 2006.
- [6] 次世代送変電機器のガス絶縁方式調査専門委員会. SF₆ の地球環境負荷と SF₆ 混合ガス・ 代替ガス絶縁. 電気学会技術報告, Vol. 841, pp. 1–62, 2001.
- [7] 佐藤純一,坂口修. 地球環境に配慮した 24 kV 固体絶縁スイッチギヤ. 東芝レビュー,
 Vol. 58, No. 12, pp. 66–69, 2003.
- [8] 佐藤克朗, 渡辺竜一, 細川績, 小林将人, 菅原雄一. 海外市場向け 24 kV 真空絶縁スイッチ
 ギヤ (c-vis)の開発. 日立評論, Vol. 91, No. 3, pp. 298–299, 2009.
- [9] T. SHIMIZU, S. KINOSHITA, S. MAKISHIMA, J.SATO, and O. SAKAGUCHI. Material and simulation technology for solid insulated switchgear. *Proceedings of the 17th ICPADM*, Vol. 17, pp. 1194–1197, 2003.

- [10] F. Erdogan. Stress distribution in bonded dissimilar materials with cracks. J. Appl. Mech., Vol. 87, pp. 403–410, 1965.
- [11] J. C. W. VAN VROONHOVEN. Stress singularities in bi-material wedges with adhesion and delamination. *Fatigue Fract. Engng. Mater. Struct.*, Vol. 15, No. 2, pp. 159–171, 1992.
- [12] 戸谷異之,小野孝,宮脇正,桐岡健.三点、および四点曲げを受ける積層ばりのはく離解析.
 日本機械学会論文集, Vol. 57, No. 540, pp. 39–47, 1991.
- [13] A. Nshimura, S. Kawai, and G. Murakami. Effect of lead frame material on plasticencapsulated ic package cracking under temperature cycling. *IEEE Transactions on Components*, Vol. 12, No. 4, pp. 639–645, 1989.
- [14] 田中直敬. 半導体パッケージにおける接着・接合界面の強度特性および導電性関する研究. 学位論文, 2004.
- [15] S. Kim. The role of plastic package adhesion in performance. *IEEE Trans. Comp. Hybrids, Manuf. Technol.*, Vol. 14, pp. 809–817, 1991.
- K. V. Doorselar and K.D. zeeuw. Relation between delamination and temperature cycling induced failures in plastic packaged devices. *IEEE Trans, Comp. Manuf. Technol.*, Vol. 13, No. 4, pp. 879–882, 1990.
- [17] F. ERDOGN. Stress distribution in a nonhomogeneous elastic plane with cracks. Transactions of the ASME, pp. 231–236, 1963.
- [18] S. Suzuki and K. Oota. Analysis of solder crack phenomena in LSI plastic packages. Advances in Electronic Packaging, ASME, pp. 343–347, 1992.
- [19] P. G. Charalambides, J. Lun A. G. Evans, and R. M. McMeekin. A test specimen for determining the fracture resistance of bimaterial interface. *Journal of Applied Mechanics*, Vol. 56, pp. 77–82, 1989.
- [20] M. Shmuel, Rubinstein, G. Cohen, and J. Fineberg. Cracklike processes within frictional motion: Is slow frictional sliding really a slow process. *MRS BULLETIN*, Vol. 33, pp. 1181–1189, 2008.

- [21] S. G. SAWYER and R. B. ANDERSON. Collocated interfacial stress intensity factors for finite bi-material plates. Engineering, Fracture Mechanics, Vol. 4, pp. 605–616, 1972.
- [22] G. P. ANDERSON, K. L. DEVRIES, and M. L WILLIAMS. Mixed mode stress field effect in adhesive fracture. *International Journal of Fracture*, Vol. 10, pp. 565–583, 1974.
- [23] C. T. SUN and C. J. JIH. On strain energy release rates for interfacial cracks in bimaterial media. *Engineering Fracture Mechanics*, Vol. 28, pp. 13–20, 1987.
- [24] 市川昌弘. 界面き裂モデルの検討および界面き裂の古典解と修正解の定量的比較. 日本機
 械学会論文集, Vol. 57, No. 538, pp. 68–72, 1991.
- [25] 荒居善雄, 土田栄一郎. 残留応力場における界面き裂の応力拡大係数の解析. 日本機械学 会第 68 期通常総会講演会講演論文集, Vol. A, pp. 151–153, 1991.
- [26] 西村朝雄, 矢口昭弘, 河合末男. シリカ粒子高充填エポキシ樹脂の強度特性. 材料学会論文 集, Vol. 38, No. 434, pp. 1322–1328, 1989.
- [27] A. Nshimura, A. Tatemichi, H. Miura, and T. Sakamoto. Life estimation for ic plastic packages under temperature cycling based on fracture mechanics. *IEEE Transactions* on Components, Hybrids,, Vol. CHMT-10, No. 4, pp. 637–642, 1987.
- [28] A. N. GENT. New and improved tests for adhesion. J. Adhesion, Vol. 23, pp. 115–122, 1987.
- [29] A. C. GARG. Delamination-a damage mode in composite structures. Engineering Fracture Mechanics, Vol. 29, No. 5, pp. 557–584, 1988.
- [30] S. L. DONALDSON and S. MALL. Delamination growth graphite/epoxy composites subjected to cyclic mode-III loading. *Journal of REINFORCED PLASTICS AND COMPOSITES*, Vol. 8, pp. 91–103, 1989.
- [31] Y. H. Pao and T. Y. Pan. Determination of stress intensity factors for interfacial cracks in bimaterial systems. *Journal of Electronic Packaging*, pp. 154–161, 1990.

- [32] H. F. Brinson and et al. Test specimen geometries for evaluating adhesive durability. 19th InternationalSAMPE Technical Conferenc, pp. 152–164, 1987.
- [33] 池田徹,他3名.LSI プラスチックパッケージのはんだりフロー割れ防止設計法の検討.日本機械学会論文集, Vol. 4, No. 1, pp. 47–55, 2001.
- [34] M. L. Williams. The stress around a fault or crack in dissimilar media. Bull. Seism. Soc. Am., Vol. 49, No. 2, pp. 199–204, 1959.
- [35] F. Erdogan. Stress distribution in a nonhomogeneous elastic plane with cracks. J. Appl. Mech., Vol. 85, pp. 232–236, 1963.
- [36] G. C. Shi and J. R. Rice. The bending of plates of dissimilar materials with cracks. J. Appl. Mech., Vol. 86, pp. 477–481, 1964.
- [37] M. Comninou. The interface crack. J. Appl. Mech., Vol. 44, pp. 631–636, 1977.
- [38] M. Comninou. The interface crack in a shear field. J. Appl. Mech, Vol. 45, pp. 287–290, 1978.
- [39] M. Comninou and D. Schmueser. The interface crack in a combined tesion-compression and shear field. J. Appl Mech., Vol. 46, pp. 345–348, 1979.
- [40] M. Comniou. An overview of interface cracks. *Engineering Fracture Mechanics*, Vol. 37, No. 1, pp. 197–208, 1990.
- [41] C. Atkinton. The interface crack with a contact zone. Int. J. of Fracture, Vol. 18, No. 3, pp. 161–177, 1982.
- [42] A. F. Mak, L. M. Keer, S. H. Chen, and J. L. Lewis. A no-slip interface crack. J. Appl. Mech., Vol. 47, pp. 347–350, 1980.
- [43] 結城良治,他3名. Hetenyiの解を用いた効率的境界要素弾性解析. 日本機械学会論文集, Vol. 53, No. 492, pp. 1581–1588, 1987.
- [44] 結城良治,他1名.異材界面き裂の応力拡大係数の境界要素解析.日本機械学会論文集,
 Vol. 55, No. 510, pp. 340–347, 1989.

- [45] 結城良治,他1名. パーソナルコンピュータによる異材接合継手・界面き裂の境界要素解析. 日本機械学会論文集, Vol. 42, No. 8, pp. 508–514, 1990.
- [46] 結城良治,他1名.界面き裂の力学.生産研究, Vol. 42, No. 8, pp. 508-514, 1990.
- [47] 佐藤満,他2名. き裂面接触を考慮したLSI パッケージの界面き裂の境界要素熱伝導・熱 弾性解析. 日本機械学会論文集, Vol. 58, No. 550, pp. 859–865, 1992.
- [48] M. Sato, S. Yoshikawa, and R. Yuki. Boundary element thermal and thermoelastic contact analysis of interface cracks in LSI package. Advances in Electronic Packaging, ASME, pp. 469–476, 1992.
- [49] 池田徹,他1名.仮想き裂進展法による熱応力場での異種材界面き裂の応力拡大係数解析.
 日本機械学会論文集, Vol. 63, No. 611, pp. 1377–1384, 1997.
- [50] T. Ikeda and C. T. Sun. Stress intensity factor analysis for an interface crack between dissimilar isotropic materials under thermals stress. *International Journal of Fracture*, Vol. 111, pp. 229–249, 2001.
- [51] A. Kinloch. The science of adhesion. J. Mater. Sci., Vol. 17, pp. 617–651, 1982.
- [52] B. M. Mayshev and R. L. Salganik. The strength of adhesive joints using the theory of cracks. Int. J. Fract. Mech., Vol. 1, pp. 114–128, 1965.
- [53] J. O. Stoffer and S. K. Gadodia. Development of tests for measuring adhesion of coatings. American Paint-Coating Journal, Vol. 1, pp. 36–40, 1989.
- [54] S. O. Show. Adhesive joint failure- a fracture mechanics approach. Adhesion, Vol. 7, pp. 173–196, 1983.
- [55] S. J. BENNETT, K. L. DEVRIES, and M. L. WILLIAMS. Adhesive fracture mechanics. *International Journal of Fracture*, Vol. 10, No. 1, pp. 33–43, 1974.
- [56] M. Bogner, W. Holzapeel, M. Maier, E. Ouella, and R. Schwarz. Adhesion between moulding compound and substrate. *IEEE/ISHM IEMT Symposium*, pp. 332–339, 1990.
- [57] J. C. W. van Vroonhove. Effects of adhesion and delamination on stress singularities in plastic-packaged integrated circuit. *Journal of Electronic Packaging*, Vol. 115, pp. 28–33, 1993.

- [58] L T. Nguyen and M. M. Michael. Effects of die pad anchoring on package interfacial integrity. *Journal of Electronic Packaging*, Vol. 115, pp. 930–938, 1992.
- [59] 服部敏雄, 西村朝雄, 村上元. A stress singularity parameter approach for evaluating reliability of LSI plastic package. *Journal of the Society of Materials Science*, Vol. 443, No. 39, pp. 1101–1105, 1990.
- [60] 三好俊郎,高野直樹,小池秀生. 接合材・接合構造の強度評価に関する研究(接合界面の応力評価).日本機械学会第68期通常総会講演会講演論文集,Vol. A, pp. 466-467, 1991.
- [61] 岸本喜久雄. 界面破壊力学-接着・接合界面の破壊力学. Ja.Soc. Mat Sci.Japan, Vol. 49,
 No. 2, pp. 238-244, 2000.
- [62] R. Yuuki and S.B. Cho. Efficient boundary element analysis of stress intensity factors for interface cracks in dissimilar materials. *Engineering Fracture Mechanics*, Vol. 34, pp. 179–188, 1989.
- [63] 山崎利春. 突合わせ継手の端部特異熱応力と破壊規準. 第6回破壊力学シンポジウム講演
 論文集, Vol. 44, pp. 242–247, 2003.
- [64] 松川宏. 摩擦の物理. 表面科学, Vol. 24, No. 6, pp. 328–333, 2003.
- [65] G. Yagawa, H.Hirayama, A.Miyoshi, and Y. Ando. Analysis of contact problem of shell structures using finite element method with pwnalty function. *Transcations of the Japan Society of Mechanical Engineers. A*, Vol. 48, No. 428, pp. 454–466, 1998.
- [66] SIMULIA Co. Abaqus/standard ver.6.4 user 's documentation. Abaqus, 2009.
- [67] Y.Y.Lu, T.Belytschko, and L.Gu. A new implementation of the element free galerkin method. *Comp.Meth.Appl.Mech.Eng.*, Vol. 139, pp. 49–74, 1996.
- [68] M. Sato, S. Yoshioka, and Yuki. Boundary element thermal and thermoelastic contact analyses of interface cracks in LSI package. Advances in Electronic Packagin, ASME, pp. 469–476, 1992.
- [69] 前野隆司. 固着・滑りを考慮した超音波モータの接触解析. 音響学会誌, Vol. 54, No. 4, pp. 305-311, 1998.

- [70] C. Shet and N. Chandra. Analysis of energy balance when using cohesive zone models to simulate fracture processes. *Journal of Engineering Materials and Technology*, Vol. 124, pp. 440–450, 2002.
- [71] G. Alfano and E. Sacco. Combining interface damage and friction in q cohesive-zone model. Int. J. Numer. Meth. Engng, Vol. 68, No. 5, pp. 542–582, 2006.
- [72] X.P. XU and A. Needleman. Numerical simulations of dynamic crack growth along an interface. *International Journal of Fracture*, Vol. 74, No. 4, pp. 289–324, 1995.
- [73] C. Dobert, R. Mahnken, and E. Stein. Numerical simulation of interface debonding with a combined damage/friction constitutive model. *Computational Mechanics*, Vol. 25, No. 5, pp. 456–467, 2000.
- [74] C. Marotzke and L. Qiao. Interfacial crack propagation arising in single-fiber pull-out tests. Comp. Sci. Tech. 57, Vol. 57, pp. 887–897, 1997.
- [75] J. W. Gillespie, L. A. Carlsson, and R.B. Pipes. Finite element analysis of the end notched flexurespecimen for measuring mode-II fracture toughness. *Composites Science* and Technology, Vol. 27, pp. 177–197, 1986.
- [76] 岩崎富生, 濱田智之, 小林金也, 佐野彰洋. ナノテクノロジーを支える材料物性シミュレー ション. 日立評論, Vol. 90, No. 2, pp. 890-891, 2008.
- [77] B. N. J. Persson, O. Albohr, U. Tartaglino, A. I. Volokitin, and E. Tosatti. On the nature of surface roughness with application to contact mechanics, sealing, rubber friction and adhesion. J.Phys. Condens. Matter, Vol. 17, pp. R1–R62, 2005.
- [78] A. G. Peressadko, N. Hosoda, and B. N. J. Persson. Influence of surface roughness on adhesion between elastic bodies. J.Phys. Rev. Lett, pp. 124301–124304, 2005.
- [79] B. N. J. Persson. Theory of rubber friction and contact mechanics. Journal of Chemical Physics, Vol. 115, No. 8, pp. 3840–3861, 2001.
- [80] B. N. J. Persson. The effect of surface roughness on the adhesion of elastic solids. JOURNAL OF CHEMICAL PHYSICS, Vol. 115, No. 12, pp. 5597–5610, 2001.

- [81] B. N. J. Persson. Adhesion between elastic bodies with randomly rough surfaces. *Phys-ical Review Letters*, Vol. 89, No. 24, p. 245502, 2002.
- [82] B. N. J. Persson, F. Bucher, and B. Chiaia. Elastic contact between randomly rough surfaces, comparison of theory with numerical results. *Physical Review B*, Vol. 65, No. 18, p. 184106, 2002.
- [83] B. N. J. Persson, O. Albohr, C. Creton, and V. Peveri. Contact area between a viscoelastic solid and a hard, randomly rough, substrate. *Journal of Chemical Physics*, Vol. 120, No. 18, pp. 8779–8793, 2004.
- [84] B. N. J. Persson. Contact mechanics for randomly rough surfaces. Surface Science Reports, Vol. 61, pp. 201–227, 2006.
- [85] C. Yang, U. Tartaglino, and B. N. J. Persson. A multiscale molecular dynamics approach to contact mechanics. *The European Physical Journal E, Soft Matter and Biological Physics*, Vol. 19, No. 1, pp. 47–58, 2006.
- [86] B. N. J. Persson. Relation between interfacial separation and load: A general theory of contact mechanics. *Physical Review Letters*, Vol. 99, No. 12, pp. 125502.1–125502.4, 2006.
- [87] C. Yang and B. N. J. Persson. Molecular dynamics study of contact mechanics: contact area and interfacial separation from small to full contact. *Phys Rev Lett*, Vol. D-52425, pp. 024303.1–024303.4, 2008.
- [88] C. Yang and B. N. J. Persson. Contact mechanics: contact area and interfacial separation from small contact to full contact. J. Phys. Condens. Matter, Vol. 20, pp. 215214.1–215214.13, 2008.
- [89] B. N. J. Persson. On the elastic energy and stress correlation in the contact between elastic solids with randomly rough surfaces. J. Phys.: Condens. Matter, Vol. 31, pp. 1–3, 2008.
- [90] 伊奈治,石川智則,杉浦昭夫,成田量一. 熱硬化型樹脂注型品の硬化プロセス解析技術の開発. デンソーテクニカルレビュー, Vol. 7, No. 2, pp. 173–196, 2002.

[91] 元木巌,時光富士雄,綿貫勇次郎. 注型品の残留応力. 富士時報, pp. 827-831, 1968.

- [92] A. Needleman. A continuum model for void nucleation by inclusion debonding. J. App. Mech. 30, Vol. 30, pp. 259–276, 2009.
- [93] J.H. Rose, J. Ferrante, and J.R. Smith. Universal binding energy curves for metals and bimetallic interfaces. *Phys. Rev. Lett.*, Vol. 47, pp. 675 – 678, 1981.
- [94] 山崎美稀,泉聡志,酒井信介.樹脂モールド構造のための接着・摩擦解析手法の開発と気
 中絶縁ロッドへの応用.日本機械学会論文集 A 編, Vol. 75, No. 756, pp. 974–980, 2009.
- [95] 上田顯. 分子シミュレーション. 裳華房, 2003.
- [96] 川添良幸, 三上益弘, 大野かおる. コンピューター・シミュレーションによる物質科学分子動力学とモンテカルロ法. 共立出版, 1996.
- [97] 岡崎進. コンピュータシミュレーションの基礎. 化学同人, 2000.
- [98] 北川浩,他3名. コンピュータシミュレーションの基礎. 養賢堂, 2000.
- [99] 日本機械学会編. 原子・分子を用いる数値シミュレーション. コロナ社, 1996.
- [100] T. Iwasaki, et al. Molecular dynamics analysis of adhesionstrength of interfaces between thin films. Journal of Materials Research, Vol. 16, No. 6, pp. 1789–1794, 2001.
- [101] T. Iwasaki. Molecular dynamics study of adhesion strength and diffusion at interfaces between interconnect materials and underlay materials. *Computational Mechanics*, Vol. 25, No. 1, pp. 76–86, 2000.
- [102] P. Dauber-Osguthorpe, V. A. Roberts, D. J. Osguthorpe, J. Wolff, M. Genest, and A. T. Hagler. Structure and energetics of ligand binding to proteins. *E. coli dihydrofolate reductase-trimethoprim, a drug-receptor system, Proteins Structure, Function and Genetics*, Vol. 4, pp. 31–47, 1988.
- [103] P. M. Morse. Diatomic molecules according to the wave mechanics. ii vibrational levels. *Phys. Rev.*, Vol. 34, pp. 57–64, 1929.
- [104] J. E. Lennard-Jones. Lennard-jones. Proc. Roy. Soc. A, Vol. 106, pp. 463–477, 1924.
- [105] A. A.Volinsky, N. R. Moody, and W. W.Gerberich. Interfacial toughness measurements for thin films on substrates. Acta Materialia, Vol. 50, pp. 441–466, 2002.
- [106] P. R. Nayak. Random process model of rough surfaces. Transcations of ASME and Journal of Lunbircaton Technology, Vol. 93, pp. 398–407, 1971.

研究業績

雑誌論文

- (1) 山崎美稀,泉聡志,酒井信介,樹脂モールド構造のための接着・摩擦解析手法の開発と気
 中絶縁ロッドへの応用,日本機械学会論文集A編,Vol.75,No.756,pp.974-980,2009.
- (2) 山崎美稀,岩崎富生,泉聡志,酒井信介,樹脂モールド構造内部における界面接着強度の 予測への原子レベルモデルリングの適用,日本機械学会論文集A編,投稿中.
- (3) M. Yamazaki, S. Izumi, S. sakai , New Method of Analyzing Adhesion/Friction in Resinmolded Structures and its Application to Insulated Rods, Journal of Solid Mechanics and Materials Engineering, submitted.

国内会議

- (1) 山崎美稀,小林将人,酒井信介,樹脂モールド構造における接着界面の強度評価手法の
 検討,日本機械学会年次大会講演論文集,Vol.6,pp.431-432,2008.
- (2) 山崎美稀,岩崎富生,原祥太郎,泉聡志,酒井信介,原子シミュレーションによる樹脂
 モールド構造の接着界面強度評価,日本機械学会年次大会講演論文集,Vol.6,pp.331-332,2009.

特許

- (1) 特開 2009-170372,真空バルブ用(出願)
- (2) 特開 2009-158218, 真空スイッチギヤ(出願)
- (3) 特開 2009-032611, 真空絶縁スイッチ及び真空絶縁スイッチギヤ(登録)
- (4) 特開 2008-311036, 真空スイッチギヤ(出願)
- (5) 特開 2008-146934, 真空スイッチギヤ(審査請求)

- (6) 特開 2008-071522,開閉操作装置(審查請求)
- (7) 特開 2004-289028, 半導体装置(登録)
- (8) 特開 2004-014860,半導体装置(登録)
- (9) 特開 2003-264252, 半導体装置(登録)
- (10) 特開 2002-343915, 半導体装置(登録)

上記の樹脂モールド構造を用いる真空スイッチギヤ,半導体装置に関係する研究業績すべて に関して中心的な役割を果たしたものである。



本論文は,著者が東京大学大学院工学系研究科社会人博士課程在学中,東京大学酒井信介教 授のご指導のもと総括したものです.酒井信介教授には,基礎的な研究姿勢から研究活動支援 に至るまで懇切丁寧なるご指導をして頂きました.深く感謝致します.

また,東京大学泉聡志准教授には,研究方針・論文のまとめ方・研究者あり方等,本研究の 全般を指導して頂きました.常に献身的にかつ熱心にご指導をしていただいたこと,この場を 借りて深く感謝致します.

本論文の審査をお忙しい中お引き受け下さり,有益な御助言と暖かい励ましのお言葉を賜り ました東京大学大学院の吉川暢宏教授,梅野宜崇准教授,崔 豪講師に深く感謝し,心よりお 礼を申し上げます.

同研究室の先輩である独立行政法人労働安全衛生総合研究所の山際謙太様と原祥太郎助教に はたくさんのご助言とご協力をして頂きました.また,研究室の後輩である現博士後期課程の 横山喬氏には,本論文の計算に関する議論ならびに普段の計算環境まで,多大な協力をしても らいました.また,参加させていただいた研究会において,先生方および研究室の皆様より貴 重なご指摘とご意見をいただきました.厚く謝意を申し述べます.

本論文は,著者が日立製作所機械研究所に在籍しながら樹脂モールド構造の製品開発におけ る研究課題を用いて,工学的なメカニズムの解明から製品レベルへの適用まで発展させまとめ たものであります.本研究の方向付けおよび研究成果の製品への適用に際しては,日立製作所 国分生産本部の土屋賢治主管技師,森田歩主任技師,小林将人主任技師から大多なるご助言や ご協力を頂きました.本研究の着手,推敲及び論文のまとめにあたっては,日立製作所機械研 究所の川端敦所長,北野誠主管研究長,佐々木直哉主管研究長,日立電線株式会社の斉藤直人 部長(元機械研究所三部部長),日立化成工業株式会社田中直敬主任技師(元機械研究所三部), 鈴木隆之主任研究員および機械研究所第三部の皆様よりご支援と有益なご助言,そして暖かい 励ましのお言葉を賜りました.

また,日立製作所機械研究所の岩崎富生主管研究員には,本研究の遂行並びに本論文をまと めるにあたり,本研究の全般を指導して頂きました.また,数々の御協力と有益な御助言,暖 かい励ましのお言葉を賜りました.この場を借りて深く感謝致し,心よりお礼申し上げます. 最後に,著者の研究推進への理解と暖かく見守ってくれた家族に感謝の意を捧げます.